†World School†

千星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
†Ｗｏｒｌｄ　Ｓｃｈｏｏｌ†

【Ｎコード】
Ｎ６５６１Ｕ

【作者名】
千星

【あらすじ】
夢を叶えるために男装して学校に通うことになった主人公、雅灯琳。
そんな時、転校していった親友から”このＷ学校に招待する”という手紙が届いた。
その学校に通うことになってから親友から”そんな手紙は知らない”と言われ・・・！？さぁさぁ、主人公たちとヘタリアキャラの不思議なお話始まるよー！ｗ

はじめに（前書き）

この話についてです
説明とかもあるので読んでもらえると嬉しいです

はじめに

初めまして！　千星と申します！
ヘタリアが好きで作ったものです！
←注意点です
・ヘタリア好き作者が書いています
　・・・があまり原作の設定が使えるか分かりません。
・更新は不定期ですがなるべくしたいと思います！
・駄文、誤字、脱字などもあると思います。
・作者は心が弱いので中傷は出来るだけしないであげて下さい。

こんなものでよければ読んでもらえると嬉しいです！！

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋
オリジナルキャラ設定

・雅灯（みやび）　琳（りん）
主人公になります。　呼び名：琳・ヒメ
高校１年生で父、兄と３人暮らし
容姿端麗・頭脳明晰・スポーツ万能でいわば完璧人間
明るく人見知りしないタイプ
料理関係が好きでそんな仕事につきたいと思っている
父親に無理な条件を出せれるが夢のために男装して学校に通う

・立花（たちばな）　芹那（せりな）
琳と空の親友
高校１年生　呼び名：セリ・セリナ
可愛い系というよりはかっこいい系で基本なんでも出来るが水泳は苦手

面倒くさがりで結構男口調
元は琳と同じ学校に通っていたが結局親の学校に通う事になった
演劇関係が好き

・日野（ひの）　空（そら）
琳と芹那の親友
琳と同じ学校に通っている
高校１年生　呼び名：ソラ
見た目は可愛い方で学力、スポーツは平均
学校が違うようになってからは出る回数が少し減る
美容師になりたい
＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

感想・意見等ありましたら気軽にお願いします！！

はじめに（後書き）

最後まで読んでいただいてありがとうございました！！

招待状（前書き）

今から本編スタートです！

グダグダですがよければ読んでください＾＾

招待状

「いってきますっ！」

そう言って玄関を出るとポストに自分宛の手紙が入っていた。

（誰だろ・・・？）

とりあえずあたしは、その手紙を持ったまま、急いで学校へ向かった。

＊

琳「あ！ソラ、おはよー♪」

空「琳（りん）おはー♪」

そういって空は自分の机に荷物を置いて琳の席へ向かう。

空「ん？　琳何読んでんの？」

琳「あぁ、これ？

セリからの手紙っぽい」

あたしも開けている途中だから内容はまだ分からない。

空「マジで・・・？

私には何もこんかったぞ・・・ｕ」

琳「まぁ、気にするな！

セリの事だから忘れているか面倒くさかったか何かでしょw」

（てか、何でメールじゃなくてわざわざ手紙？）

空「だったらいいんやけどυ

・・・で、セリナなんて？」

あたしは、出来るだけ簡単にまとめて言った。

琳「えーと、このW学園に招待するからよかったらこの学校に来ない？

・・・みたいなことが書いてある」

空「・・・？　どゆこと？」

琳「いやだから、セリの行っている学校に通わない？ってことだと思うけど・・・υ」

空「私は？」

琳「・・・・・・さぁυ」

（あたしに聞かれても・・・）

＊

琳「終わったーっ」

チャイムが鳴り今から昼休みが始まる。

背伸びをしているあたしに、

空「おーいヒメーお弁当食べよー♪」

・・・と、ソラがお弁当を持って来る。

琳「何故にヒメ？」

空「今までもヒメって呼んでたやんw」

琳「いやソラ、キミは今日の第一声

『琳おはー♪』だったんだよ？」

空「まぁ、そんな時もあるさ☆」

琳「あ、はい。　そうですか・・・」

ちなみにヒメというのは、あたしのアダナみたいなもので
ソラの呼び方が周りの人にまで広まって”ヒメ”呼びが定着してしまったのだ。

一体どこがヒメなのか教えて欲しい。
だけど、ソラはそんな話には気にせず

空「そや、ヒメは結局セリナからの手紙どうすんの？」

・・・と、お弁当を食べながら聞いてくる。

琳「うーん・・・分からないなぁーυ

招待の返事より手紙の内容が気になるかな？」

空「確かに普通、招待なんかせんやんなー。

何かあったんかな？」

琳「かもしれないυ

よし、帰りに電話してみよう！」

空「いいね、いいね！

ついでに、私に手紙を送らなかった理由も聞きまくってやろー♪」

（・・・おいυ）

招待状（後書き）

最後まで読んで頂いて有難うございます！

感想・意見等あればお願いします

進路希望調査（前書き）

どうも！
今更ながら気付いたのですが、ヘタリアキャラがまったく出てきません
ｕ
早く出したいです・・・。

では、本編どうぞ＾＾

進路希望調査

琳「手紙・・・どうしよう・・・・ｕ」

結局、ソラと帰りに電話してみたけれどセリは電話に出なかった。

（・・・そういえば、セリが転校してから遊んだりチャットとかで話したりはしたけれど、メールとか電話はしてなかったなぁ）

今思えばおかしい話。

何故ケータイで連絡をとっていなかったのだろう・・・。

琳「お兄ちゃん、そろそろご飯できるから食べる用意して」

煉「はいはい、分かったよ」

眠いとぼやく兄をスルーしてご飯を並べていく。

＊

琳「・・・・・・」

今日の手紙のこともあるけれど、今の状況は一体なんだろう・・・。

お父さんが帰ってきて進路希望調査のプリントを見せてしばらく無言の時間が過ぎていく。

そもそもお父さんは、あたしの進路・・・というかあたしの夢に賛成していない。
料理関係の仕事に就く為に大学のレベルを下げるのが嫌らしい。

琳「・・・・・・」

父「・・・何か言ったらどうだ？」

琳「あたしは進路を変えるつもりも、夢を諦めるつもりもありません」

父「まったく。

こんな仕事のどこがいいんだか」

琳「ちょっとそんな言いかたしないでよ！」

父「せっかく勉強ができても

そんな事に使うなら無駄でしかないな」

琳「人のやりたい事、悪くばっかり言わないで！！

お兄ちゃんには好きなことさせてるじゃない！！」

父「煉（れん）はちゃんとアイツにあったところに進んだだろ。

お前はどれだk「うるせぇよっ！！こんな時間に何騒いでんだ！！」

煉「ったく・・・進路でここまでもめるとかアホかよ」

琳・父「「・・・・・・」」

お兄ちゃんに状況を話したあたしとお父さんは
お兄ちゃんの反応に黙る事しかしなかった。

煉「父さんも琳のしたいことくらいさせてやれよ」

父「は、何でこんなこと」

煉「何が嫌かは知らねぇけど、
そんなに納得がいかないなら何か条件出せばいいだろ」

父「この仕事自体が気に入らない。
そんなにこの仕事がやりたいなら男の姿でもして学校通え。
そうすれば認めてやる」

琳・煉「「はぁっ！？」」

いきなりのお父さんの変な言葉にお兄ちゃんと同時に驚く。

父「ほらできないだろ、どうせその程度だ」

煉「・・・・・・。（どんだけ嫌なんだよ、むちゃくちゃだな・・・

）」

琳「・・・いいよ、通うよ。

男装して学校に通えばいいんでしょ？

馬鹿にされるくらいならやってやるよ！！」

煉「ちょ、琳！？

お前なに言ってんの！！？」

父「は、やれるもんならやってみろ！」

煉「いや、そうじゃねぇだろ！

2人で話し進めんなって！どういう展開だよ！？

普通に考えておかしいだろ！！」

後の話は聞かずに、あたしはそのまま自分の部屋に戻った。

イラつき気味にセリの手紙を見ているともう一枚紙が入っていることに気付いた・・・。

進路希望調査（後書き）

グダグダとか言いたいことはたくさんあるんですが・・・
とりあえずカオス！！

親子の会話内容がｗｗｗ

地味に兄が出てきましたｗｗ

文才下さい＾ｑ＾

驚かれる日（前書き）

どうも、千星です！
最近疲れが溜まって三つ重になりましたｗｗｗ↑
まぁ、そんな話は置いておいて本編どうぞ！

驚かれる日

琳「おはよー」

教室に入りソラに手を振る。

空「あ、ヒメおはｙ・・・え゛っ！？」

『えええええええっ！！？』

空「ちょ、ヒメ！？　か、髪どうしたん！！？」

実は昨日、男装するんだったら長い髪の毛はジャマだろうと、
思い切ってショートカットにしたんだけれど・・・
まさかここまでみんなに驚かれるとは思わなくて、逆にビックリした・・・υ

琳「え、えと・・・υ」

＊

あたしは、とりあえずソラだけには話しておこうと思い、
あまり人気のない所に呼んだ。

琳「あ、ソラ実はね・・・」

空「え！？　なになに、あらたまって！

私をこんな人気のない所に呼び出すなんてまさか・・・告白！？w」

琳「いや、ないから・・・υ　（告白って言えば、告白だけれど・・・）」

空「じゃあ、なにさー」

あたしが説明するとソラは

空「え！？マジ・・・υ

てか、セリナと連絡ついたん！？」

・・・と慌てた様子だった。

琳「いや、セリとは・・・υ

実はあの手紙の中にもう1枚、学校の場所と電話番号が書いてある紙があって、

連絡したら、また家まで迎えに来るって」

空「そかそか、やから髪短くしたんか・・・。

まさかヒメのお父さんに娘を男装させる趣味があったとは・・・」

琳「・・・ん？

ソラ、何か解釈間違えている気が・・・」

空「てか、ヒメやと”男の子”やなくて”男の娘”やな☆」

琳「よしソラ、話を聞こうか！　（あと、何が変わったのか分からないし！）」

空「琳が夢に向かって頑張るんやから私は応援すんよ！頑張りや！！」

琳「ソラ、ありがとう。

そして話を聞いて！w」

多分ソラが変な発言をしているのは、あたしに気を使ってくれているからだろう。

空「・・・にしても、セリナもヒメも2人して私をハブるなんてヒドイ！！」

琳「・・・・・・」

（あ、気のせいだったかも・・・）

驚かれる日（後書き）

最後まで読んで頂き有難うございます！

次回はやっとヘタキャラが出てくるハズです！
ちゃんと出てきたらあの２人が出てきます＾＾

それでは、次回も読んで下されば嬉しいです！

感想・意見等あればお願いします！！

迎え（前書き）

どうも！なんとまたまた感想を頂いて感動しています！！
本当に有難うございます！！千星です！

今回はやっとヘタキャラが出てきます！

迎え

琳「よしっ、準備できた！」

今日はとうとう、あたしがW学園に向かう日である。

琳「な、何か緊張する・・・」

あたしがそわそわしているとお兄ちゃんが

煉「お、今日からだったっけ？」

・・・と、聞いてくる。

琳「うん、ご飯とか家事が出来なくてごめんね；」

煉「気にすんなって！　頑張って来いよ！！」

琳「うんっ！」

＊

（迎えに来るって車・・・だよね・・・。

セリも何回か遊びに来ていたし結構近いのかな・・・？）

―ピンポーン―

（あ、迎えかな？）

琳「は、はーい！　今開けまｓ［バーンッ！！］

琳「！！？」

「Ｈｉ！　迎えに来たんだぞ！」

「おい！うるさいぞ、アメリカ！

人の家なんだからもう少し落ち着いて入れ！！」

「そういうイギリスの方がうるさいんだぞ！

ジャマしないでくれよ！ＨＥＲＯの登場なんだからさっ！」

琳「・・・・・・」

（何なんだろう、この人達・・・。

どっちともうるさいし帰ってくれないかな・・・）

あたしが黙って見ているとさっき来た人達の１人と目があった。

英「ん？　あぁ、騒がしくしてすまない。

雅灯（みやび）　琳（りん）・・・だったか？」

琳「あ、はい。

あの・・・W学園からの迎えの人ですか？」

（あ、この人は結構まともな人かも！）

英「あぁ、そうd「そうなんだぞ！！」うるせぇよ！アメリカ！！」

（・・・・・・気のせいか；）

あたしは、少し溜息をつきながら家に家族が居る事を思い出した。

琳「あの、中に家族が居るのでどちらも静かにして頂けると嬉しいです」

英「あぁ、すまない；」

米「まったく！　これだからイギリスは！」

英「いや、お前だろ！！」

琳「だーかーら！　お二人共、静かにしましょうね（黒笑）」

英・米『・・・・・・はい；』

琳「・・・とりあえず、外に出ましょうか；」

静かになったけれど、なんだかまた騒ぎ出しそうな気がして外に出る事にした。

迎え（後書き）

長文になってしまってすいません；
最後まで見て頂き有難うございます！

ヘタキャラは5連合から出そうと決めていました！
それだとやっぱりこの2人かな、とw↑

次回もよければ読んでください＾＾

W学園へ（前書き）

どうも、千星です！
この挨拶にもそろそろ慣れてきましたｗｗｗ
それでは、本編です！

W学園へ

琳「ふぅ・・・ここら辺まで来たら大丈夫かな」

あたしは、あまり騒いでも大丈夫な所へとりあえず案内した。

米「本当かい！？

それならやっと話せるよ！」

英「いや、さっきから普通に話してただろ！」

（・・・ん？

今思ったけれど、この人達・・・見た目的に日本人じゃないよね・・・？）

落ち着いて2人を見て思った。

もっと早く気付くべきだけれど・・・。

米「ヘイ！　ところでキミはまだ制服を貰っていないのかい？」

琳「あ、はい・・・。

学校についてから渡すと言われていたので」

英「そうなのか。

ならここで話をするより、早く学校に着いた方がいいんじゃな

いか？」

琳「あ、確かにそうですね」

米「なら早速車に乗るんだぞ！」

―車の中―

琳「・・・・・・」

（何を話していいか分からない・・・）

そもそもあたしは何も知らないわけで・・・・υ

米［もぐもぐもぐもぐもぐもｇ（（ｒｙ］

英「おい、アメリカ！　少しは落ち着け！」

米「ええー、別にいいじゃないかー」

英「良くねぇよ！！」

米「相変わらずイギリスはうるさいね！」

英「な、なんだと！？

うるさいのはお前だろ！！」

（・・・どっちもどっちなんだよね；

てか、なんで国名で呼び合っているんだろう？　アダナか何かなのかな・・・？）

琳「あ、あの・・・」

このままだと学校に着くまで騒がしそうなので、会話を中断させる事にする。

英「ん？　どうかしたか？」

米「どうしたんだい？」

琳「言い合いとかなしにして何かお話しませんか？」

米「ＤＤＤＤＤＤ！　そうだね！そうしよう！」

英「だったらまずは自己紹介からだな」

琳「はいっ」

（やっとまともな話ができそう！）

W学園へ（後書き）

変なところで終わってしまいました；

よければ次回も読んでみてください！

自己紹介（前書き）

どうも千星です！
更新が凄く遅れてしまいました；；
ＰＣができないというのは苦痛ですねυ

そして、お気に入りが１件増えていました！！
涙をこらえるくらい嬉しかったです！！
これからも頑張っていきたいです！！

自己紹介

米「じゃあ、まず俺から自己紹介するんだぞ！

俺の名前はアメリカさ！！

困ってることがあったら何でも言ってくれて構わないんだぞ、

何たって俺はＨＥＲＯなんだからさっ！　ＨＡＨＡＨＡＨＡ☆」

（・・・何故自己紹介まで国名？）

と、思ったけれど後で聞けばいいかな？　と思い返事をする。

琳「アメリカさんですか、よろしくお願いします」

英「じゃあ、次は俺だな。

俺の名前はイギリスだ、よろしくな」

琳「はいイギリスさん、よろしくお願いします」

米「次はキミの番なんだぞ！」

アメリカにそう言われ慌てて自己紹介をする。

琳「あ、はい！　えと、あｔ・・・じゃなくて僕の名前は雅灯　琳です。

よろしくお願いします！！」

一瞬自分の事を”あたし”と言いそうになって気付いた。

（そっか・・・あたしは男子として学校に通うんだなー）

＊

英「～ってことは、俺は雅灯と同学年ってことか」

自分たちの話をしているとイギリスも1年という事が分かったんだけれど・・・

琳「えっ！？そうなんですか！！？

ずっと年上だとばかり・・・」

あたしは、先輩だと思っていたので驚きが大きかった。

英「俺はそんなに年上に見えるのか・・・？」

琳「あ、いえ！　迎えに来る人だったから年上だと勘違いしたんだと思います；」

英「なるほどな。まぁ、一応生徒会役員だからな」

琳「そそそ、そうなんですか！？　・・・なるほど、納得です。

・・・ってことは、まさか・・ア、アメリカさんも・・・？」

米「なんだい・・・？　その不安そうな顔は！？」

何故かさっきまで静かだったアメリカが不満そうな顔でこっちを見ている。

英「別にいいだろ、どうせ違うんだから。」

米「俺だって高1になれば入れるんだぞ！」

琳「え・・・アメリカさんは年下なんですか・・・？」

英「あぁ、こいつは中3だ。

てかさ雅灯、話しにくいだろうし敬語じゃなくていいからな！あと”さん”付けも！」

琳「え・・・本当ですか！？」

英「いや、駄目だったらこんな事言わねぇから／／／」

琳「うん！ありがとう、イギリス！！

じゃあ、僕のことは琳って呼んで！

なんか、さっそくお友達になれたみたいで嬉しい♪」

英「っ／／／／／／お、おう／／／　（何、ドキッとしてんだよ俺

！！）」

米「あ！　俺達と会ってから初めて笑ったんじゃないかい？

あと、イギリス相手に敬語なんて使わなくていいんだぞ！

もちろん、俺にも敬語は不要なんだぞ！！」

琳「え！？う、うん、改めてよろしくね！アメリカ（ニコッ」

米「よ、よろしくなんだぞ！／／／」

自己紹介（後書き）

アレなんですよ。
どうしても琳ちゃんをイギリスや他の国と同じクラスにしたかったから
一つ学年をずらしてしまったんです；
内容を変えてしまって申し訳ない；；
アメリカが高校になる前の話で、秋くらいの設定です＾＾

凄い長文になってしまいすみません；
最後まで読んで頂き有難うございます！！

これがW学園（前書き）

お久しぶりです；；
どうも、千星です＾＾

やっとW学園に着きます。
今までずっと3人のターンでしたからねw
ではどうぞ

これがW学園

英「・・・ん？　あ、着いたぞ」

琳「えっ！？」

話している途中でイギリスがいきなり言うから驚いてしまった。

米「ほら琳！　W学園なんだぞ！！」

アメリカが指を指す方を見ると建物があった。

琳「へぇー！　あれがW学園なんｄ・・・は！？」

英・米『！！？』

米「どどど、どうしたんだい！？」

いきなりあたしが大声を出してしまい、２人とも驚いていた。

琳「え、だって・・・あれが学校！！？」

（す、凄いところにきてしまったのかも・・・ｕ）

学校を見る限り、あたしが今まで過ごしてきた学校と大きさも何もかも違う。

英「・・・まぁ、普通よりはでかいよな」

琳「いや、これ普通の学校と比べたらダメだよ！　比べられないよ！」

米「なんだい？　琳、学校に驚いていたのかい？
ＨＥＲＯが通うんだから１番凄い学校じゃないとダメなんだぞ！」

英「お前はちょっと黙ってろよ」

琳「あ、あはは・・・」

（みんなお金持ちなんだね、きっと・・・）

米「（小声）　・・・い、イギリス！琳の目がうつろなんだぞ」

英「と、とりあえず・・・学園長のところに行くか！」

米「そ、そうだね！　ほら行くんだぞ！」

琳「！　あ、はい。
そうですね！」

＊

琳「ふぅ・・・あ、待っていてくれたんだ！
ありがとう、２人とも！！」

学園長に挨拶を終え、待っていてくれたらしい2人に手を振る。
とりあえず学園長はあたしが男としてこの学校に通う事を許可してくれたみたい。
緊張していたせいで会話内容がおぼろげだけれど・・・υ
とりあえず、この学校に通うならそれでいいらしい・・・何故？υ

米「もちろんなんだぞ！」

英「いや、別にお前のためじゃないからなっ／／／／
　学園長が話が終わったら”立花”呼んで来い
　って言ってたからここに居たんだからな／／／／」

（え、立花ってもしかして・・・セリ？）

とは思ったけれど違っていたら嫌だったから聞きはしなかった。

英「・・・しっかし来ねぇなー」

イギリスが頭をかきながらケータイをいじっている。

琳「イギリスってその人とメアド交換してるんだ♪
　てか、学校でケータイ使っていいの！？」

英「ん？　お前まだこれ貰ってねぇのか？」

琳「うん、寮に準備してあるって」

英「そうか、これは学校から配布されてるヤツで使っていいんだ。
連絡とか時間割もこれで報告されるし。
あと、生徒手帳の役割もしてっから貰ったらなくすなよ」

琳「へぇー！　そうなんだっ！　便利だね♪」

米「そうなんだぞ！
それにこの学校、何故か電波遮断されてるから
このケータイじゃないと圏外になるんだぞ！」

琳「え！？　そうなの！！？」

そういってケータイをみた。

琳「・・・あ、本当だ、圏外」

「はぁ・・・めんどい。
で、イギリス何？」
（え・・・？　この声って・・・・！？）

これがW学園（後書き）

読んで頂き有難うございます！！

次は彼女が出てきます！

・・・tk、もう出てきてますが；；

ドライな一言（前書き）

はい、千星です＾＾

さっきの続きです。

では、どうぞ！

ドライな一言

「はぁ・・・めんどい。

で、イギリス何？　」

（え・・・？　この声って・・・・！？）

英「あぁ、学園長がお前呼べってさ」

「ふーん、そう」

・・・彼女は相変わらずドライな返し方をする人だった；

英「・・・あぁ；」

琳「・・・せ、セリ！！？」

芹「・・・うるさ。

てか、なんでいんの？」

あたしたちとの会話が気になったのかアメリカがあたしたちの会話に入ってきた。

米「え！？　キミたち知り合いなのかい！？」

芹「・・・煩い。
ちょっとは静かに出来ないのか？」
米「・・・・・・・」
（あ、あのアメリカが静かになった！？）
琳「転校してきたからだよ。
久しぶり、セリ！」
芹「ふーん、そうなんだ。
・・・で、なんでこの学校なん？」
（・・・・・・・へ？）
セリの言葉に疑問を持ち聞いてみる。
琳「あのさ、セリが招待状送ってきたのが
始まりなんだけれど・・・・υ」
芹「・・・はぁ？
招待状？　何それ？」

琳「・・・・・・・（えええええええっ！！？）」

＊

あたしたちはとりあえず場所を移動した。
持っていた招待状を見せて、事情をセリに話した。

芹「なるほど、そういう訳か・・・。
だから髪切ったんか」

琳「・・・うん。
でも、セリが知らないってどういうこと！？」

芹「多分、ウチの親の仕業ってことやな」

はぁ・・・と大きな溜息をついたセリは頭に手を当てて

芹「めんどいけど親んとこ行って来る」

といって部屋を出ていった。

（来て早々どういうことなんだろう・・・；）

ドライな一言（後書き）

芹那さん登場しました。
ちょっとドライですね；；
でも、良い子ですからっ！！・・・きっと・・・。

芹「・・・煩いんやけど」

千「ひっごめんなさい！！」

芹「まぁ、どうでもいいけど
　なんか言って早く終わらせてくれへん？」

千「（彼女が何故ここに・・・？）
　は、はい！それでは読んでくれて有難うございました！」

謎が増えた（前書き）

どうも千星です！！w
学校に着いたけれど芹那さん以外なかなかでてこないってwww
それでは本編どうぞ^^

謎が増えた

琳「謎が増えていく～；；」

そういいながらドアを開けて、部屋をでた。

英「話は終わったのか？」

外でアメリカと話していたイギリスがこちらに気付き声をかけてきた。

琳「うん。

何かよく分からないけど」

（むしろ謎が増えたくらい）

米「さっきはビックリしたんだぞ！

いきなり芹那が出てきたけど、どうしたんだい？」

あたしは、さっきのセリの出ていった様子からして

２人とも結構驚いただろうなーと想像した。

琳「あぁ、学園長の所に行くって」

英「やっとか・・・；

そもそも、そのために呼んだのに何で後回しになってんだ・・・

？」

琳「あ、あはは・・・υ」

イギリスが困ったように言い始め苦笑いした。

米「ところで、キミたちはどういう関係なんだい？」

琳「・・・ん？　あぁ、セリとは前の学校のクラスメイトで

中学校からの付き合いなんだ♪

もう1人の子と3人でずっと一緒だったんだよ」

米「OH！　そうだったのか！」

琳「うん、でも会うのは久々だから嬉しいな♪」

＊

芹「・・・・・・チッ」

セリが帰ってきたみたい！・・なんだけれど・・・υ

米「（小声）　ど、どうしたんだい？　芹那はυ」

英「つか今舌打ちしたぞ・・・υ」

なんだかアメリカはセリが居る時は少し静かな気がするw

琳「た、多分・・・学園長と何かあったんだと思う・・・・υ」

もしくは、眠いか面倒か・・・・。

『・・・・・・』

琳「と、とりあえず・・・寮がどこか教えて欲しいな、なんて・・・・υ」

（き、気まずい；；）

英「あ、あぁ！そうだな！

準備があるんだったな！」

（イギリスありがとおおおお！！）

心の中でフォローしてくれたイギリスに感謝を叫ぶ。

セリに何があったかは今は聞きにくいから後で聞くことにしよう。

謎が増えた（後書き）

ここまで書いてなかなか進まないことが分かりました↑

さて、前回は（なぜか）芹那さんがいました！
だから今回はゆっくｒ「ＨＡＨＡＨＡＨＡ☆」
Σ何かいるぅー！！？
「何かじゃないんだぞ！！まったくＨＥＲＯなんだからさ！」
・・・はい、最後まで読んでくれてありがとうございます！
「ちょ、何でおわらせるんだい！？」
感想・意見等ありましたらお願いします！！
「ちょっ、じ、次回も見てくれたら嬉しいんだぞ！」

寮と制服（前書き）

どうも千星ですw
そろそろお昼ごはん食べないと・・・！お腹が空いてきた；；
今回はタイトルどおり、寮が出ますよー＾＾

寮と制服

芹「はい、ここが琳の部屋」

そう言ってセリが指を指した部屋を見る。

（５０２号室かぁー）

琳「ほー・・・ってひろっっっ！！？

こんな高級ホテルみたいなところが寮なの！！？」

部屋を見れば広くて綺麗なだけでなく色々そろっていて、

テレビや冷蔵庫、小さいけれどキッチンらしきものまである・・・。

芹「そうだけど？

まぁ、俺は隣の５０１号室だから分かんないこととかあったら

聞いて」

何故かあたしは特待生扱いらしいから同じ特待生扱いのセリと寮の

部屋が近いらしい。

（あたし的にはセリが近い方が助かるからいいけれど

でも周りから見たら、男女の部屋が隣って事だけれど大丈夫なのか

な・・・？）

芹「んじゃあ、俺は一旦部屋に戻るから。
まぁ、夕飯の時間になったら迎えにいくわー」
琳「・・・え？　キッチンあるけど自分で作るとかではないの？」
芹「あるだけ。
普通に学食だから」
琳「そ、そうなんですかー」
芹「うんそうだから、じゃ。
あ、あと一応制服着てみろよ、サイズ間違えとかあるかもしんないし」
琳「うん了解！ありがとね☆」
手を振って鍵を閉めてから制服に着替え始める。
（男子の制服とか変な気分・・・w）
着替えが終わってサイズが合っていることを確認。
・・・・・・ん？

・・・何でサイズを知っているんだ、学園長！！

・・・まぁ、この学園だし、深く考えない方がいいよね；；

［ピンポーン］

と、呼び出し音が鳴る。

部屋の１つ１つについているらしいけれど・・・；；

琳「セリかな？てか普通に早いし！」

はいはーいと言ってドアを開ける。

米「やぁ！　荷物を持ってきたんだぞ！」

英「そこで止まってないでさっさっと入ればか！！」

琳「・・・・・・え？；；」

何故２人、そういえばいつの間にか居なくなったなーとか思ったけれど・・・！

英「あぁ、これ学園長がお前の荷物運べって渡されたんだ」

どこに置けばいい？と聞きながら説明をしてくれている。

琳「あ、ありがとう！

えっと・・・まぁ、適当に置いておいて」

英「てか琳、制服着たのか、明日からだろw」

イギリスが笑いながら言う荷物を置く。

琳「サイズあわせだよっ！！」

そういっているとアメリカが驚いたように言ってきた。

米「り、琳・・キミ・・・

男だったのかいっ！！？」

女の子だと思ってたよ・・・と呟いているアメリカに

「だから会う前にそう言っただろ、ばか！」とイギリスがアメリカの頭を軽く叩いていた。

琳「あ、あはははは・・・；；」

（女の子であってますよー）

苦笑いしながら、心の中で呟いた。

寮と制服（後書き）

はい、アメリカは琳ちゃんのことを女の子だと思っていたんですよーw

まぁ、実際はそうなんだけれどねwww

次回は食堂に行くはずだから他のヘタキャラも出てくるはず・・・！

エネルギーごと（前書き）

どうも千星です！
最近腰が痛いです、もう年かも・・・；

今回は2人とは別のヘタキャラが出てきます！
ではどうぞ＾＾

エネルギーごと

「はぁ・・・疲れた・・・・・・」

あたしは、動きやすい服に着替えてベットにダイブする。

あの2人はというと

『それじゃあ、荷物運び終わったら来るように

って学園長に言われてるからもう行くんだぞ☆』

『じゃあ、またな』

・・・と言ってあたしのエネルギーごと持って行ったのである。

（・・・寝よ;）

＊

芹「――そろそろご飯なんだけど、いい加減起きてくんない？」

琳「・・・ん～、あれ、もうそんな時間・・・？」

セリに起こされて目を擦りながら窓を見ると、もう暗い。

芹「ほら、目が覚めたなら行くよ」

琳「う、うん・・・！」

―廊下―

琳「～にしてもこの寮も大きいねっ！」

パタパタと歩きながら辺りを見回す。

芹「まぁ、普通よりは大きいんじゃない？」

（ふ、普通よりはって・・・；）

あはは・・・と笑いながらセリの方を見る。

ドンッ！

琳「わっ！？」

「ヴェッ！？」

ドサッという音と一緒にしりもちをついた。

だ、誰かとぶつかったみたい・・・。

琳「あいたたた・・・す、すみませんっ、前方不注意で・・・・・・・・・・;;」

「いたた・・・こっちこそごめんね～;;」

芹「おい琳、大丈夫か？」

琳「う、うん、ありがと」

セリにひっぱってもらいようやく立ち上がった。

前を見ると曲がり角だった。

（き、気付かなかった・・・;;）

そう思っていると怒鳴り声が聞こえてきた。

「こら！イタリア！！だからちゃんと前を見て歩けと言っただろう！！」

「うわわっごめんなさい！ごめんなさああい！！;;」

「ど、ドイツさん・・・もうその辺に・・・;;」

琳「・・・あ、あの・・・僕も悪かったので、

もうその辺にしてあげて下さい・・・;;」

あたしも悪かったのにその人だけ物凄く可哀想です・・・・;;;

＊

「さっきは本当にごめんね・・・・;;」

お説教？から開放されてペコッと頭を下げられた。

一瞬可愛い／／／／って思ったのは内緒↑

琳「い、いや！こっちこそ前方不注意だったんで・・・・;」

次からはちゃんと前を見て歩きます;;;といって頭を下げる。

「もういい！　まったくいつまで謝り続ける気だ！！」

芹「・・・うるさ。

怒鳴んなくてもいいじゃん」

セリが不機嫌そうにいうとさっきまで静かだった人が丁寧に挨拶してきた。

「こんばんは、芹那さん。

そういえば、そちらの方はお見かけした事がありませんね」

あたしの方を見て軽く頭を下げた。

（礼儀正しい人だなぁー）

「・・・ん？　そういえばそうだな」

「ヴェー！　それにしてもキミすっごく可愛いね！良かったら一緒n――・・・」

「こらぁ！イタリアぁぁああ！！！」

「ご、ごめんなさいっごめんなさいっっ！！；；」

＊

「まったく、相手の格好をよく確認しろ！」

男物の服を着ているだろ！とまた怒鳴っている・・・。

・・・男物着ている女の人だって普通にいますよ・・・；；

「ヴェー・・・だって女の子だと思ったんだもん；；」

一応（設定上）男であることを説明するして、軽く自己紹介をした。

琳「え、えっと・・・」

「あぁ、私とした事が、申し遅れました。

日本と申します、あなたや芹那さんと同じ1年生です。

よろしくお願いします」

（可愛いけれど、男の人だよね・・・？）

琳「はい！よろしくお願いします！！」

「俺はドイツだ」

琳「え？・・・あ、はいよろしくお願いします」

自己紹介が終わっていた事に気付く。

自己紹介みじかっっっ！！？；；；

「ヴェー俺はイタリア＝ヴェネチアーノ！　よろしくね琳！」

琳「よろしくお願いします！！」

伊「敬語なんていいよ～同学年なんだし！」

琳「あ、うん！　よろしくね！」

日「折角ですから、夕飯ご一緒しませんか？」

芹「あぁ、別にいいけど」

琳「はい、喜んで♪」

エネルギーごと（後書き）

３人出てきましたね＾＾
このトリオ好きです／／／↑
ｔｋ、無駄に長いっていうｗｗｗ（（

この学校の人（前書き）

どうも、千星です！
最近ちょっとずつですが書き方を変えてきています。
気付いた人が居たら凄いですね！！
・・・さて、この駄文を見ている人はいるのかしら・・・。

では、本編どうぞ＾＾

この学校の人

伊「へぇー！！　琳、料理好きなんだ！！」
琳「うん！　とっても♪」

ご飯を食べながら話していると趣味の話になり今に至る。
イタリアも料理が好きらしく意気投合する。

伊「じゃあさ、じゃあさ！　今度一緒に何か作ろうよ♪」
琳「え！？いいの！！？」
伊「もちろんだよ～。
　作ってみんなで食べよ！」

芹那・日本・ドイツと、3人の方を見ながらいうと
あたしの隣にいるセリがボソッと呟く。

芹「・・・ん？　何か巻き込まれてない？」
独「そ、そうだな・・・。」

日「まぁまぁ、お二人の作った料理を
　食べさせて頂けるのですし良いじゃないですか」

伊「うん、美味しいの作るよ～♪」

あたしもみんなに頑張りますよーと行って笑う。

この学校に来て作らなくなったら来た意味がないもんね。

＊

日「あの、雅灯さん」
琳「あ、琳でいいですよ！」

話しかけてきた日本に話そっちのけで言う。

日「え、そうですか？　では、そう呼ばせて頂きますね」
琳「はい！」
日「それでは琳さんも私に対して敬語でなくて普段どおりで話かけてくださいね（ニコッ）」

わ、笑った！　笑った顔初めて見たっ！
・・・てまぁ、会って間もないからそんなに知らなくても当然なんだけれどねw
―っにしても綺麗な人だなー、美人さん／／／
・・・まぁ、カッコイイって言えばカッコいいんだけれどねっ！

てか、この学校の人・・・

まだそんなに会ってないけれどみんな見た目いいなー。
まるでそろえたみたい―・・・

日「・・・？　琳さん？　どうかしましたか・・・？」

琳「い、いえ！　なんでもありませn・・・じゃなかった！
何にもっ！　それじゃあタメ口で話すね☆」

日「はい、お願いしますね。
　それで、琳さんは明日からこの学校に通うのですか？」
琳「うん、明日からだよ」
あたしは楽しみ♪といいながらうん、と頷いた。
伊「ヴェ、じゃあ同じクラスになれたらいいね！」
琳「うん、みんなと同じクラスになれるといいな♪」
そこまで言ったところでセリがハァと溜息をしながら会話に入ってくる。
芹「・・てかさ・・・
　俺ら全員同じクラス、って訳じゃないんだけど」
琳「えっ！？　違うの！！？」
みんなの方を見回してから
「みんな仲良いからそうだと思っていたのだけれど」
というとみんながそうだよ、と答えてきた。
日「ええそうですよ、私と芹那さんが同じで」
独「俺とイタリアが同じなんだ」

伊「不思議だよね～。
俺とドイツ、知り合ってからクラス分かれたことないんだよ～」
とイタリアが笑って言ってきた。
理由はなんとなく分かるよw

面倒を見る人が居ないと！・・・・ってことだよね、きっとw↑
大変そうだなぁー・・・・；；
ドイツさん・・・頑張れ↑

この学校の人（後書き）

はい、最後まで見て頂いて有難うございます！！

前から思うのですが、キャラが出てくるとしばらくそのキャラばかり・・・

何故だ・・・！

それではノシ

3人　（前書き）

どもども、千星です！
これ、更新したら寝よう・・・！眠いｚ（（
あ、この話は本編のような番外編のような微妙な話です。
オリキャラ3人の寝る前の話です。
琳くんは感想と意気込みだけれど、後の2人は後々の話で出てくる事に
ちょっと関係してる事を言っています。
では、どうぞ、ゆっくりしていってね！（（

3人

琳「よし、寝よっと」

お風呂上がって寝る準備ををする。

―にしても、寮にお風呂があってよかった・・・！
あたしは寮に入ったことがないから、
もしかしたら普通にあるものなのかもしれないけれど。

でも、殆どの人は大浴場の方使ってるし。
大浴場あるのに入れないのも残念だけれど・・・・；；

明日から新しい学校なんだよね・・・！
頑張らないと！！

＊

芹「・・・チッ、意味分かんない」

ベットに寝転がって後は寝るだけの状態で思い出す、
学園長―・・・いや親の言葉・・・。

なんで俺だけじゃなくて、琳まで連れてきてんだよ。
何を聞いても
『あの子がこの学校に通わせるため』
としか言わない。

アイツは一般人だろうが・・・！

・・・もしかして、一般人じゃ、ない・・・？

いや、んな訳ないだろうが・・・！

でも、空の名前を出した時・・・妙なこと言ってたんだよな・・・。

空も来るかもしれないけど琳が来ないと調べられないとか・・・。

どういうことだ・・・？意味分かんない。

一体何が起きてる・・・。

―ったくめんどい・・・。

＊

空「ヒメ、明日からやけどちゃんと出来とるかな？セリナも・・・」

あぁ、明日から私だけ1人とか寂しいやん・・・；

見送りも忙しくて行けへんかったし、無理してでも行けばよかった；

まぁ、後悔してももう遅いか；；；

それにしても、なんで私は誘ってくれんかったんやろ・・・？

また、絶対聞いたるからな！覚えとれよ、セリナのヤツっっっ！！

来週辺りにでも遊びに行こうかな？　よし、行こっ！

そろそろ寝るか・・・！

3人　（後書き）

はい、いつになくグダグダで意味不でしたね；；
特に芹那さんの部分がっっっ！！
あと、そらちゃんおひさ＾＾
「おっひさー」
あら？またいらしてるし（（（（
「まったくっ！もっと私だしてや！忘れられるやん！！」
あ、すみません；；
でも、今日また出る感じにしましたよ
「でも、少ないー！！」
じゃあ、善処しますねw
見て下さった方有難うございました！！
「この流し方好きやな・・・；次回もよかったらみてな！」

クラス（前書き）

どーん！千星です（（
本編どうぞ！

クラス

「はい、このクラスだよ」

そういって案内してくれたのは担任の草間（くさま）　環（たまき）先生。
さっぱりした感じの先生だ。

琳「1年A組、ですかー」
環「そうだよ、それじゃあ入るよ」
琳「は、はい！」

＊

環「えー、では知ってる人もいるかもしれないけど転校生を紹介するよ」

琳「え、えと・・・初めまして、雅灯　琳です。どうぞよろしくお願いします」

環「えー・・・それで雅灯さんの席は―・・・っと・・・・・・・

あぁ、あの席が空いてるね、そこに座って」

はい、と言ってその席に移動する。

先生が指を指した席は、窓際後方2番目。
すごく良い席なんだけれどさ・・・

昨日も普通に授業あったはずだよ、何でそんな微妙な位置が空いているの？
普通は一番後ろとかでしょ・・・！

まぁ、救いは・・・

英「このクラスになったのか」
琳「うん、イギリスこのクラスだったんだね」

知り合いがいる事。

よろしくね、と言って座る。

＊

日「まさか琳さんと同じクラスになるとは思いませんでした」
琳「僕もだよ！あ、てかみんな席近かったんだね！」

なんとすごい偶然、後ろはセリと日本。
仲良い人が近いってすごい偶然！というとセリが

芹「席が近くになったから話すようになったんだろ？」

と言ってきた。

そういえば、とイギリスが付け足した。

英「このクラス、最近席替えしてねぇな」

日「そういえばそうですね」

芹「夏くらいからだったよな」

いやいや、おかしいでしょ！

秋だよ？今１０月半ばなのに！？

そう思っているとイギリスが

英「そういえば、立花が転校して来てんのに

もう1人来てるけど人数バランス大丈夫なのか・・・」

と不安そうにしている。

日「確かに・・・まぁ、理事長は自由な方ですから」

そういう日本に驚く。

あなたの隣にその人の娘いるんですよ！？

てか、そこは自由じゃなくてしっかりしないとダメでしょ！！

セリはクラスを軽く見回してから不機嫌そうに言った。

芹「・・・クラスの奴ら琳に質問攻めしないな。

チッ、俺ん時はすげぇ来たくせに」

琳「あ、あはは・・・；；」

（知り合いいて本当に良かった・・・！）
質問攻めは無理…！

クラス（後書き）

最後まで見て頂き有難うございます！！（、∀、＊）
これからは沢山のキャラが出せればいいな、と考えてまっす♪

お昼（前書き）

どうもお久しぶりです、皆様に忘れられてもしょうがない千星です。
そろそろ夏休みの宿題が苦しくなって参りました・・・。
更新凄く減るね！これは（（（（（
では本編どうぞ！

お昼

琳「ん～・・・終わったー」

背伸びをしながらそういって教科書などを片付けに始める。

今からお昼休みだ。

日「お疲れ様です。授業はどうでしたか？」

琳「が、頑張ったよー・・・もう、ダメ・・・ガクッ・・・！」

そう言って机にうつぶせになる。

日「口で『ガクッ』と言われても・・・もうお昼休みですからお昼たべませんと」

琳「・・・くっ！ここは僕に任せて先に行けー！僕も後で追いつくから・・・っ！」

芹「死亡フラグ立ててないでさっさと片付けろよw」

琳「はーいw」

言われたとおりさっさと教科書などの片づけを再開する。

英「おい、琳」

イギリスに呼ばれたらしく振り返って返事をする。

琳「ん？イギリス、なに？」

英「弁当一緒に食べる奴とかいるのか？」

琳「いやいやー、お恥ずかしいながら誰も」

英「なら、一緒に食べねぇか？

・・・ってお前のためじゃないからな！俺のためだからな！／／／」

ん！？あたしは誘われているんだよ・・・ね？
イギリスから誘われると思っていなかったから驚いたｗｗ

琳「もちろん！ありがとう☆」
英「・・・お、おう／／／」

芹「・・・ん？なんだイギリスがツンデレを発動させているじゃないか」
日「本当ですねぇ、和みますｗ」

・・・ということで普通にこの４人で食べる事になりましたー。

＊

日「それで、出し物何にしましょう？」
英「定番だと喫茶店とかお化け屋敷とか演劇とかか・・・」
芹「あぁ、俺は普段演劇してるからパス。
喫茶店だろ喫茶店メイド・執事喫茶みたいなｗ

それでよくね？俺は裏方で眺めとくから」

日「私は芹那さんと同じ意見がいいです」

英「同じ意見”で”じゃないのかよ！？珍しく発言に自分の意思込めやがった！？

しかも眺めんなよ！意見出したんだからせめて表で働けよ！！」

琳「あ、あの・・・この話は・・・？」

食べるのをやめて、恐る恐る右手を小さく上げ質問する。

芹「あぁ、文化祭の出し物」

琳「もうそんな時期！？」

英「お前が転校してきたばっかだからそう思うだけで普通だろ」

うっ・・・！た、確かに・・・・・・。

琳「なんでこの3人で決めようとしているの？」

日「それは芹那さんがクラス委員だからですよ」

学祭委員も後で決めるらしいけど気になったのは・・・

琳「セリが！？」

英「本人は嫌がってたが推薦されてなw」

芹「ったくめんどい」

あぁ、なるほど・・・納得です。

日「ですから出来るだけ選択肢を減らして

早く決められるようにしようと案を出している所なんですよ。

もう決まりましたが」

英「なに勝手に決めてんだよっ！！
喫茶店で決定じゃねぇからな！！」

芹「イギリスは執事か・・・？」

英「なに話進めてんだよ！！無視すんなよ！？」

日「いえ！ここはメイドでしょうっ！！」

英「盛り上がんなっ！！てか誰がやるかバカ！！」

状況を把握。

悩むのならいっそのこと・・・

琳「じゃあ、午前は執事で午後はメイドでいいんじゃない？」

芹「琳ナイスアイディア！！」

日「それで行きましょう！！」

英「やらねぇよばかぁ！！」

お昼（後書き）

今回はちょっと琳くんはっちゃけましたねぇｗｗ
普通は結構こういう設定のはずだったけれど
転校直後だからおさえめにしていましたｗ
これからはちょくちょくはっちゃけさせますよー！↑

長いやりとり（前書き）

どうもどうも千星です！
今回は久々あのお方の登場でｓ（（
では、どうぞ＾＾

長いやりとり

琳「てか、結局喫茶店になったねｗｗ」

今は放課後。

みんな帰る・部活の準備をしているところ。

ちなみに出し物は言ったとおり喫茶店。

しかもメイド・執事喫茶・・・。

冗談だと思っていたのにまさか本当になるとは・・・本気を出したなあやつら・・・。

英「なんでなるんだよ！このクラスの奴らおかしいだろ！」

芹「まーまー。

もう決まったんだから文句言うなやｗ」

日「そうですよ、イギリスさん。

イギリスさん用にばっちり衣装は用意しますからね」

英「用意すんな！！」

琳「そっかｗイギリスは2着だもんね」

英「いや、着ないからな？なんで着ること前提なんだよ！」

琳・芹・日「「「・・・え？」」」

英「え？じゃねぇよ！」

イギリスの声がよく響きました。

＊

セリの部活は何かよく分からないけれど休みらしい。
大丈夫なのかな？演劇部・・・。

琳「そういえばさ、ソラとまだ連絡とってないや」
芹「てかさ・・・あいつから連絡取れないんだしさっさとかけれやれよ」

あ、そういえば前のケータイここじゃ使えないんだった・・・。

琳「でも僕だけかけるのも変だよね。空、セリとも話したがっているし」
芹「でも、交代しながらは話しにくいだろ」

琳「そういえば・・・ここってネット使えたよね？」
芹「・・・ん？あぁ、使えるな」
琳「じゃあ、ｓｋｙ●ｅ使えるんじゃない？」
芹「・・・あ、使えるかも」

琳・芹「「・・・行くか！」」

ダダダダダーッ！！

と走る音を立てて寮の部屋にダッシュ！
周りに人がいないのが救い。

パソコンの電源ＯＮ！
ｓｋｙ●ｅを開く。

ちなみに全部屋パソコンがあります、さすがお金持ｔ（（ｒｙ

琳「おーい、どう？」
芹「うん、普通」

その言葉を聞いて安心して告げる。

琳「空もう帰っているだろうし呼ぶかｗ」
芹「もちｂ」

＊

空「Σうおぁ！？いきなりやん、２人ともｗ」

空が驚いたようにして出てきた。

琳「やほーｗ」
芹「おひさ～」

空「ヒメやっほー♪・・・んでセリナ、私が何言いたいか分かる？」
芹「いや、さっぱり。
　あぁ、もしかして連絡遅いとかｗ」

空「ちゃうはぁ！！それもあるけどちゃうはぁ！！」
芹「どっちだよ・・・あとなんで2回聞かされた」
空「そんなんどうでもええねん！とりあえずこの状況！
私だけハブられたっぽい状況について！！」

琳「あー、それについてだけれど・・・」
空「なんなん？」
琳「かくかくしかじかで・・・」

とりあえず、あったことを教える。

空「とりあえず、分かったけど・・・なんで省いたん？」
琳「文と労力の無駄を削減しただけ！気にしないで！」
空「おいちょっ待て！・・・あーまぁええはぁ」
芹「・・・・・・（あ、いいんだ）」
空「あーつまり、セリナは知らんかったんか」
芹「全っ然知らん、親の独断」
空「そーなんか、ならええはぁ！」
琳「あー、良かった♪」

空「そんかわり！また遊びに行くからな？」
琳・芹「「・・・・・・（「▽」）」」
空「おい、なんやその反応は？」
琳「・・・い、いや！何でもないよ？お待ちしております、空様」
空「いや、反応おかしいからっ！！」
芹「まーいいじゃん、いいじゃんw」
空「よくないし！？」

このやりとりがしばらく続きました（笑）

長いやりとり（後書き）

文字ばっかでしかも長文・・・。
なんかもうホントすみませんm（＿＿）m
空ちゃんお久しぶりですw

ＨＥＲＯ（前書き）

どうも千星です、夏休みの宿題は諦めようかな↑

今回はタイトルからして出る人はあの方ですｗ

そしていきなり文化祭当日に飛びましたｗｗ

ではどうぞ＾＾

HERO

空「この辺のはずなんだけどなぁ・・・」

私は地図を見ながら辺りを見回した。

ヒメとセリナに文化祭に誘われて喜んでいたのまではいいんやけど近くまで来ているはずなのにW学園が見当たらん。

「はぁ・・・」

思わず溜息がこぼれた。

・・・すると、

「ヘイ！キミ困ってるみたいだけどどうしたんだい？」

・・・と誰かが私に話しかけてきた・・・んかな？

空「・・・え？私ですか？」

一応、相手に確認をとろうと相手を見ると・・・。

空「！！？」

が、外人さんやんんんん！！？；；

相手の人は金髪に碧眼・・・どうしよ・・・私、英語にはあんまり自信が・・・！；；

米「キミ以外の他に誰がいるんだい？・・・って、どうしたんだい！？」

空「・・・あれ？」

日本語だ・・・てか、落ち着いてみれば最初に話しかけられた時も日本語だった。
ああ、よかった・・・。

米「大丈夫かい？キミ」
空「あ、はい、大丈夫でっす！」
米「そうかい、よかったんだぞ！
　ところで、さっき溜息をついてウロウロしていたけど道にでも迷ったのかい？」
空「違うような、そのとおりなような・・・；；
　あ、あの・・・W学園ってどこにあるか知りません？」

この辺りの人なら知ってると思いとりあえず聞いてみた。

米「俺ならその学校の生徒なんだぞ！
　でも、関係者以外立ち入り禁止のはずだったぞ・・・」

なんと！？この人生徒か！？なんでこんな時間にウロウロしてるん！！？

空「ま、まぁ、招待してもうてるんで；」

ちなみにヒメとセリナが学園長に許可もらって
２日の文化祭の間、寮にとまってけ☆って言われたわけだ。

米「へぇ！そうなんだ！
　なら俺が案内するから、一緒に行こう！」
空「え？ＯＫなんっすか！？」
米「もちろんなんだぞ！なんだって俺はＨＥＲＯなんだからね！」
そういって笑いかけてきた彼を見て思わずかっこええ！！っと思った。
てか、リアルにかっけぇ！！（見た目、性格込みで）
困ってる人見かけて声かけるだけやなくて案内までしてくれるとは
空「ホンマにヒーローっぽいなぁ！」
米「え！？本当かい！？嬉しいんだぞ！！
　（普段はみんな黙れ！っていうからこんな事言われたらは嬉しいんだぞ／／／）」
空「え？ホンマｗ　・・・てか、名前なんていうんですか？
　あ、私は日野　空いいます、よろしく！」
とりあえずこのヒーローの名前を聞くと同時に自己紹介もした。
米「へぇ！空っていうのか！
　俺はみんなのＨＥＲＯアメリカだぞ！よろしく！」
空「へぇ！ひろっていうんかー」
名前のひろとヒーローをかけてアメリカ出身・・・というだと（勝手に）解釈して
私は再び「よろしく！」といった。
米「いや、だからアメリカなんだぞ；；」

空「え゛ぇ!?名前がアメリカなん!!?」

名前がアメリカって・・・欧米の人は国名と同じ名前つける人もおんねんなぁー。

そのまま話をしながらW学園に向かった。

HERO（後書き）

はい、gdgdですねww
てか、この2人しか出てきてないしw
しかもあんまり進まなかった；；
次は空ちゃん学校到着予定でっす♪

これがW学園　パート2（前書き）

どうも千星です！
前書きに何を書くか思いつきませんねｗｗｗ
では、どうぞ＾＾

これがW学園　パート2

米「ほら、着いたんだぞ！」
空「へぇー！ここがW学園なんｋ・・・！？」
ここに来るまでにアメリカと結構話してタメ口とか呼び方とかが決まったよ！
・・・ってそんな解説してる場合やなくて！！
空「こ、これが学校ぉぉおおお！！？」
米「あぁ、またこの反応なのかい？もう琳で慣れたよｗｗ」
あぁ、ヒメも似たような反応したんかｗ
空「慣れたんかいｗ・・・にしてもでっかい学校やなぁー！
こんな学校に通えるなんて羨ましいっ！」
米「ＨＡＨＡＨＡ☆　いっそのこと通えばいいんじゃないかい？
おっと、それじゃあ中に入ろうか！」
空「いや、無理やろｗｗ
んじゃあ、案内よろしく☆」

＊

芹「遅いな・・・」

琳「迷っているんじゃない？しかもここ学校って思えない見た目だし・・・」

英「―ったく、アメリカの野郎・・・！」

イギリスが頭をかきながら近くに来た。

琳「イギリスどうしたの？」

芹「アメリカと喧嘩した、とか？ｗｗｗ」

英「ちげぇよ！笑いながら言うな！

　アメリカが出かけたっきり帰ってこないいんだよ；」

イギリスの話を聞き、思わずセリと顔を見合わせた。

琳「何故にこの日、この時間帯に・・・？；」

芹「おいおい、文化祭もうすぐだぞ、どうするよ？」

そういって現在の状況を聞いていると入り口付近に見慣れた人影が見えた。

米「ん？やぁみんな！そんなところに集まってどうしたんだい？」

琳・芹・英「「「・・・はぁ」」」

（（（（もうアメリカはいいや・・・））））

心配して凄く損した・・・。

あたしの心配した時間を返してくれ↑

・・・と、その時。

米「みんなしてなんだい！？」
空「お？ヒメ～！セリナ～！やっほー♪」
空がひょこっと顔を出した。
米「え、知り合いだったのかい？」
空「ＹＥＳ！ｗ」
琳「ソラ！久しぶりー♪」
芹「おひさ」
空「会うんはおひさやな！文化祭に誘ってくれてサンキュー♪」
あ、空に文化祭の説明を簡単にしとかないと・・・！
琳「えっと、今日は部活中心で明日は学級中心だからね」
空「ういっす！」
空は返事をしてちょっとしてからイギリスが口を開いた。
英「それにしても、琳お前の友達は女ばっかだな；；」
（・・・ギクッ；；）
芹「煩いんやけど、ぼっち」
英「ぼっちじゃねぇよ！名誉ある孤立は素晴らしいんだからな！」
空「・・・あ、孤立してること認めた」
英「お前らなんか嫌いだ、ばかぁ！！」
イギリスの声は良く響きました、作文↑

これがW学園　パート2（後書き）

はい、作文じゃありませんｙ（（

次回は何書きましょう・・・；；

文化祭1日目（前書き）

はい、千星です。
そして文化祭ですw
夏休みの課題ＫＩＥＳＡＲＥ☆（（おい
それじゃあ、本編です＾＾

文化祭1日目

琳「じゃあ、どこまわる？」
空「そんなこと言われても私この学校の事知らんし」
文化祭が始まってしばらくしてからソラと文化祭を回ろうとする。
ちなみにセリは部活の劇があるからしばらく来れないらしい。
空「そういや、ヒメは部活入らんかったん？」
琳「うん。てか、何部があるかもまだ分かんないw」
転校してすぐ文化祭があったから結構後回しにしている事が多い。
空「んじゃあ部活見学も兼ねて、セリナの劇が始まるまでそのへんぶらぶらしとこ！」
琳「そうだね！」

＊

空「・・・ヒメ、この学校には変わった部がいっぱいやね・・・・・」
琳「そ、そうだね・・・僕も思った」
回るのは良いけれど、こうも変わった部ばかりだと疲れる・・・。
空「お、調理部だ！お菓子みたいなの出しとるらしいし、入らん？」
琳「いいね、ちょっと入って休もうか」

＊

「―ったく何で男ばっかりなんだよ、ちくしょう！」
「まぁまぁ、この学校は男子多目やし殆ど部活の出し物しとるんやから」

「「！！」」

空「うお！めっちゃ綺麗やんここ！」
琳「ホントだね♪まぁ、この学校自体綺麗だしね」
空「せやな～w」

「いらっしゃい、ベッラたち」
琳・空「「・・・はぇ！？」」

なんかイタリア君？みたいな人が・・・は？え？
てか、ベッラって何？

「お席はこちらですよ」
「おいロマ！まったく手ぇだすんが早いんやから；；」
「いいだろ別に！」

なんか新しい人までなんだろうね、この部・・・。
しかもあたしらの時と態度がちがう。

「まぁ、こいつの事はほっといてゆっくりしてな☆」
琳・空「「は、はぁ・・・」」

とりあえずあたしもソラも気が抜けたような返事になってしまった。

空「ちょ、ヒメ！もうすぐ劇始まる時間やん！行くで！！」
琳「あ、ホントだ！？ごちそうさまでした！！」
「おう！おおきにな！」
「ありがとうございましたー」

あたしらはペコッと頭を下げて調理部をでた。

「可愛ええ子らやったな～」
「ああ、そうだな／／／」

この2人と後で出会うのはまた別のお話。

＊

日「ああ、お2人の席はとってありますよ」
琳・空「「ありがとー」」
あたしらは日本の隣の席に座った。
ちなみにぶらぶらする前に日本に空のことを紹介した。

琳「にしても人が多いね；」
空「カメラとか構えてる人ばっかやしｗｗ」
琳「演劇だからじゃない？あとカメラ構えながら言うなしｗｗ」

ふと、デジカメを構えているソラにツッコム。

日「ふふっ、分かってませんね、お2人共」

琳・空「「・・・へ？」」
日「実は芹那さんはファンクラブ（主に女子から）があるほどの人気なかたなのですよ」
琳・空「あー、何か予想つくー（「▽｜）」
地味にセリは昔からカッコイイ！と人気なのである。
琳「それに男役だもんねw」
空「そーいや、日本は部活の大丈夫なん？」
日「ええ、大丈夫ですよ。
　この貴重なシーンを撮るために休憩時間をこの時間にしたんですから」
（（・・・え））
カメラとかを構えている日本。
何かここだけ聞くとすっっっごく怪しいですよ。

＊

芹「はぁ・・・疲れた」
琳・空「お疲れー」
日「お疲れ様です、まだ文化祭はありますし少し回りましょうか」
琳・空「「賛成ー♪」」
芹「・・・・・・」
空「レッツゴー♪」
結構遅くまで回りました。

文化祭1日目（後書き）

なげぇ！！？

予想よりすごく長くなりました；；

全部読んだ人は勇者ですねw名乗り出て欲しいものです↑

あと、スペインとロマ存在薄い出し方になってしまった；；

この部屋は防音室です（前書き）

どうも千星です！
今回はオリキャラ3人がメインですw
何故でしょう・・・？

本編どうぞ

この部屋は防音室です

琳「この学校の文化祭って大規模だね！学校自体が大きいからかなぁ」

文化祭1日目が終わった。
あたしは部活していないから回ることに徹底していたけどねw

空「ホンマすごいなこのガッコ！！」
芹「まぁ、普通に大規模だよな。
　はぁ、疲れた・・・これで劇も終わったし帰れる」
琳「文化祭楽しもうよ・・・；」
芹「この学校は2日目メインやから。それに俺劇ばっかで回れてへんし」

セリが面倒くさそうにいうといきなりソラが口を開いた。

空「・・・そーいや、私ってどこに泊まんの？」

琳「・・・あ」
空「忘れっとたんかい！！」

＊

芹「そんなん俺らの部屋に泊まるに決まってるやろ」

セリが当たり前のように言ったのを聞いて驚いて返した。
琳「え！？何！？決まってたの！！？」
空「へーそうなん」
琳「２人で楽しく過ごして僕だけ仲間はずれ！？」
そういうとセリはソラの方を見てから普通に言う。
芹「なんで俺がこんな煩いのと２人で泊まらんとダメなん？」
空「へーそうなｎ・・・ってそれ酷くない！？」
琳「（小声）　でもあたし一応男の設定なんだけれど空と一緒はダメじゃない？」
一応事情のため、小声で話すと
芹「まぁまぁ、とりあえず部屋に入ってみろって」
―とセリが言った。
『しばらく部屋で待っといて』と付け足して。

＊

待っている間に部屋着に着替えたけれど、どうするつもりなんだろう・・・。
琳「ヒマだし本でも読もうかな」
空「へぇー！ヒメは今どんな本持っとるん？」

琳「えーとね・・・は？ちょ！？えええええ！！？どこから湧いてきたの！！？」

本を取ろうと立つといきなりソラに話しかけられた。
ここ確かオートロック式なハズなのに！！

空「Σちょ、人を虫みたいに言うなし！」
芹「そうだぞ琳。間違えるなよ！」
空「セリナが、珍しく・・・！」
芹「ただの虫じゃなくて害虫だ」

セリの言葉にソラが耐え切れず叫んだ。

空「あんたらなんて大っ嫌いやぁあああああ！！」

芹「いや、嫌いでもいいけど野宿にする？」
空「ごめん、大好き！」
琳「Σ切り替えはやっ！？」

ソラがセリに再び叫んだ。

空「あーもう！セリナのドS！！」
芹「煩いメガネ」
空「コンタクトもってますー！コンタクトに変えたろか腹黒ー」
芹「鬱陶しいでバカ」
空「・・・ぐっ、変えられへん」

琳「ちょ、否定しようよｗｗｗ
　それよりどこから入ってきたの？」

そう聞くとセリは顔色1つ変えずさらりと告げた。

芹「あぁ、この部屋と俺の部屋つながってるだけ」

琳「あぁ、なるほどー！・・じゃないから！何故につながっている！？」

芹「まぁ、気にすんな☆」

琳「ちょ、珍しく爽やかな笑顔で言わないで！！」

空「じゃあ、気にすんなｗｗｗ」

琳「笑いながら言うなし！」

芹「このネタそろそろ飽きたし」

空「無表情で言うなし！てかちょっとで飽きんな！」

琳「いや、そろそろ・・・ね？」

空「いや、『ね？』やないやろ」

そういった後、ソラは何かに気付いたように辺りを見渡した。

空「そういや、ベッド2つしかないけど私どこで寝るん？」

「「「・・・・・・」」」

あたしとセリはお互いを見て、ソラの方を見る。

琳・芹「「・・・地べた？」」

空「鬼ぃぃぃぃぃぃぃぃ！！」

ちなみにこの会話（主に叫び）は寮部屋の1つ1つが防音室なので外には聞こえません。

この部屋は防音室です（後書き）

はい、最後まで見て頂きありがとうございます。
防音って便利ですよねーｗ
地味に今回空ちゃんの扱いがひどいっていうｗｗ

文化祭2日目（前書き）

どうも千星です＾＾＊
体育祭めんどうです；；；
あ、今回は本編長いです、どうぞ←

文化祭2日目

米「ここが１－Ａなんだぞ！」

そう言ってアメリカが扉の前で止まった。
ちなみに何故アメリカと一緒かというと、私がこの学校に詳しいわけもなく普通に迷ってると
アメリカに声をかけられ、案内ついでに『一緒に回ろうじゃないか』と言われたからである。

そういや、ヒメとセリナのクラスって何やるんやろ

そんなことを思っている間にアメリカが勢いよく扉を開ける。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

私たちを迎えたのは普通の生徒ではなく執事・・・つかセリナだった。

空・米「「・・・・・・・え」」

芹「なんだお前らかよ・・・。―チッ・・・言って損した」
米「・・・今、舌打ちしなかったかい？；；」
空「おいおい；私ら一応お客様ねんから損したとかいうな。あと舌打ちも」

そう言っているとまた生徒・・・というより執事とメイドが数人きた。

琳・日「「おかえりなさいませ、ご主人様」」

ヒメと日本がそういってから、「2人ともいらっしゃい」と、普段どおりの口調に戻った。
しかも二人ともメイド服・・・何故？

そしてイギリスもアメリカが居たせいか少し遅くなりながら嫌そうに口を開く。

英「・・・おかえりなさいませ、お嬢様、・・・メタボ様」
『ぶはっｗｗめ、メタボ様ｗｗｗｗ』
米「おいイギリス！！誰がメタボなんだいっ！？」

イギリスとアメリカ以外から笑いが溢れる。
ヒメと日本は必死に笑いを堪えているが、私はお腹を押さえて大爆笑。
セリナ到っては近くにあった机をバンバンッと叩いて笑っている。

ようやく笑いが治まってきたところで質問してみる。

空「そーいやさ、なんでヒメと日本はメイド服着てるん？」

一応両方（ヒメは設定やけど）男のはずだ。
そう聞くとセリナが笑いながら「似合ってるやろｗｗ」と2人を見た。
うん、似合ってる。思わずカメラを構えたくらい似合ってる↑

日「Σなっ、私はれっきとした日本男児ですよ！女装が似合うわけないじゃないですか！？」
琳「日本君・・・僕も一応日本男児（の設定）だよ。

まぁ、何でって聞かれるとこの学校は女子が少ないから
何人かは女子や役もしないといけないっていうこと」
ヒメが日本にツッコミながらも私に軽く説明してくれた。
この2人が選ばれた理由もよく分かった。
女装したら女の子にしか見えないよねｗｗ
空「そして数少ない女子のセリナが執事やってる理由は・・・」
なんか聞かなくてもなんとなく分かった。
日「満場一致で執事に決定しましたよねｗ」
芹「あぁ、まぁメイドは論外やったし」

そう言っているといきなり会話が中断される。
『ねぇ、君たち。いつになったら働くのかな？コルコルコル』
空「Σうぉわ！？」
いきなり現れた彼は物凄い長身で黒ーいオーラをだしてコルコル言っていた。
ハッキリ言って怖いです；；
『あぁ、君はお客さんだったんだね。
凄く馴染んでたからクラスメイトかと思っちゃった、ふふっ』
琳「わっ！？そういえば忙しいんだった！ごめんねロシア君；；」
芹「ーったくめんどい」

ヒメとセリナは普通に会話して仕事に戻ろうとするが
後の人は彼を睨んだり顔を青ざめたりしている。

琳「あ、空！あたしらしばらく忙しくなるみたいだから先に他の所回ってきて！」
空「え、でも私ら今来たばっか・・・」
芹「3時くらいからくる方がオススメb」

ヒメとセリナが凄く良い笑顔で親指をグッ、と立てている。

英「お前ら何教えてんだよ、ばかぁ！！」

え、一体何があるん？

空「とりあえず、了解したわwまた来るなぁー」
琳・芹「「また、後でー」」
英「くんなぁーっ！！」

空「・・・え；；」
米「イギリスの事は放っておいて行くんだぞ！」
空「わわっ！？」

アメリカが私の手を引っ張って連れて行こうとすると同時に体勢が崩れそうになった。
ぎりぎりセーフ；；アメリカめ！私をこかす気か！？

そう思いながら1－Aから出た。

＊

米「さて、どこか回りたい所はあるかい？」
空「まず、このガッコのこと詳しくないから特に決まってへんよ」
米「じゃあまずあのクラスから入るんだぞ！」

アメリカが近くになった教室に指を指す。
まぁ、２人のクラス以外は回る計画も
そんなに立ててなかったからアメリカが指差した方へ向かう。

空「ういっす！あ、でもさアメリカはクラスの方とか大丈夫なん？」
米「もちろんなんだぞ！」
空「ならよかったわｗｗｗ」

そして、３時くらいになるまでアメリカと学校を探検しました。

空「そーいや、結局３時くらいから何があるん？」
米「俺も聞いてないんだぞ」

そう言って１－Ａの扉を開ける。

『お、おかえりなせいませ・・・ご主人様／／／／・・・っげ！？』

そう言って私らを迎えてくれたのはメイド姿のイギリスだった。
可愛いな、おい↑

空・米「「い、イギリス・・・？」」
英「こっちみんな、ばかぁ！！！」
米「な、なんて格好してるんだい・・・？」

私とアメリカは状況がよく分からない、とアイコンタクトをした。
そしてとりあえず似合っていたからデジカメにおさめた↑

英「ちょっ、撮んなバカ！！」
空「ええ～～～！？」
日「残念ながらここは許可された人以外の撮影は禁止です」

「ショック；；」っといいながらも実は前きたときにも数枚撮っていたことは内緒にする↑

芹「安心しろ、俺らの代わりにしっかり日本が撮ってくれるからｂ」
空「・・・は？」
琳「日本は新聞部だから許可されているんだよ」
日「まぁ、漫研と掛け持ちで少々忙しいですが・・・；」

「大変です；」と言葉をもらしながらもその後にカメラを構えた日本の顔は輝いて見える。

その後ヒメに説明してもらったところ、
イギリスは午前は執事、午後はメイドをやることにされていたらしい。
マジ笑うｗｗしかも似合ってるしｗｗｗ

空「ねぇ、なんか特別メニューとかはあるの？」

こういう喫茶店には何かあるのがお決まりだと思うんやけど。
そういうとヒメが「あるよー」といってメニューを指差す。

琳「これを頼むとメイドさんが美味しくなる魔法をかけますよー」

しっかり仕事をしながらボソッと「指定はイギリスだけに指名してね」
と、小声でいったヒメはさすがなよーな、ダメなよーな・・・w
空「アメリカは何頼むー？」
折角だからしばらくここでゆっくりすることにした私らだったが
アメリカの返事を聞く前に別の声に気を取られえる。
『イギリスなんて格好してるの？お兄さん笑っちゃうwww』
笑いながら言うその人にイギリスは「何しに来たんだよ、ばか！」
と言って睨んでいる。
そして彼は、何故か当たり前のように私たちが座っていた席に同席してきた。
まぁ、自己紹介をしながら適当にメニューを選んでいく。
ついでに特別メニューのヤツをイギリス、ヒメしていで選んでやったwww
執事にはそういうのはないらしい・・・少し残念だ。

（裏方）
琳「ちょ、なんで僕まで指定されてるの！？」
英「俺は絶対行かねぇからな！！」
日「いえ、お二人共行ってください！」
くそう・・・なんで日本は指定されていないんだ・・・。
芹「・・・お前ら、仕事しろ」
「「「・・・はい」」」

そういってセリは「んじゃあ、これ持っていけ」と3人のメニューを渡す。
うわぁ・・・行きたくない、逝きたくない。

芹「逝って来いb」
琳「はぁ・・・逝ってくる；；ほらイギリスも逝くよ」
英「・・・字、違うくね？」
日「それが伝わったイギリスさんは凄いと思いますよw」

そしてイギリスと共に3人の所の席へ向かった。

＊

空「お、来た来たwww」
琳「お待たせ致しました（指定するなって言ったよねあはははは―）」

心無い作り笑顔を作りながら仕事をする。

空「・・・・・・（ヒメなんか怖い；；）」
米・仏「「・・・・・・・；；」」

もはやあたしもイギリスもやけくそだ。
もう、日本君やセリがデジカメ（セリはケータイ）を構えててもムービー撮られても気にしないよww

琳「では…僕たちがもぉっと美味しくなるよーに魔法をかけますね（黒笑）」

・・・せーの」

琳・英「萌え萌えどっきゅん？」

空「わぉｗｗｗ」

米・仏「「……！？」」

口調が壊れていたって気にしないよ☆

次の瞬間、空は目を見開き、フランスは飲んでいた水を噴出しそうになり、

アメリカは顔を真っ赤にしながらゴンッと大きな音を立てて机に突っ伏した。

眼鏡だから割らないようにね。

「では、僕たちはこれで失礼します」

そしてあたしとイギリスはすぐに裏方の手伝いと称してその場から即離れた。

日「芹那さん・・・！」

芹「ＹＥＳ！！ｂ」

あの２人は放置してあたしとイギリスは急いで裏方に回った。

文化祭2日目（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます！
いつもより長くてすみません！！
地味にろっさまとフラ兄だしましたよ！少なくてごめんね；；

あぁ、琳君が・・・イギリスもごめんね！
メイドとか執事とか（（ｒｙ　変人ですね、元から変人ですけｄ（
（え

関係（前書き）

どうも千星です！
体育祭終わってすぐテストとかおかしいですよね！！w（（
今回の話はちょっといつもと違うような内容です^^
では、どうぞ←

関係

琳「ふぅ、今日は何か一段と疲れた気がする・・・・;;」

文化祭の出し物やイベントが一通り終わり中庭?のような所で座って貰ったジュースを飲む。
辺りを見ると結構暗い。
こんな時間までやっていたんだ、お疲れあたし↑

しばらく休んでいると足音が聞こえてくる。
誰か来たみたいだけれど暗くて顔がよく見えない・・・。

誰だろう・・・?

そう思っていると足音が近づいてくる。
だんだんと顔が見えるようになってきた。
そして、足音の主があたしに気付いたらしく声をかけてくる。

英「お、琳じゃねぇか。お前もここに来てたのか」
琳「あ、イギリス!お疲れー」

イギリスに手を振るとイギリスの肩に人形?が乗っている事に気付く。

琳「い、イギリス・・・・;;」

え、嘘!?イギリスってそういう趣味!?人形とか持ち歩いちゃう感じの人!!?;;;

さっきのあたしの言葉に疑問を持ったのか「なんだよ？」と、聞き返してくる。
あたしは思わずイギリスの肩に乗っている人形をを指差して
「そ、それ・・・」と言ってしまった。
イギリスは、「ああ、これか」と言ったあと、何かに気付いたような顔をして
あたしに「お前、こいつが見えるのか？」と聞き返してきた。
琳「見えるも何も見えなかったらそんなこと聞かないよ；；」
あたしがそういうとその人形が光を放ちながら？動き出した。
『イギリス！この子、わたしが見えてるみたいよ』
―と、動き出した。
琳「Σう、動いたあああああ！！？」
てか喋ってるしいいいいいいいいいい！！！
え、何？人形じゃないの！？立体映像！？
実はドッキリとか！？物陰からセリとソラがきてドッキリでしたーって落ち！！？
あたしが訳も分からず焦っているとイギリスが話し始めた。
英「あー、こいつはノエル。って言っても妖精だから普通の奴には見えないはずなんだが・・・」
琳「え！？妖精！！？；；」
イギリスの口からありえない単語が聞こえた。

英「本当だからな！てか何で見えてるんだ？」
の「分からないわ。霊感があるのか、まぁ普通じゃないことは確かね」
琳「Σえっ！？僕普通じゃないの！？」
がーん。あたしは一般人から変人に進化した！・・・みたいな感じ？；；
英「まぁ、普通じゃねぇだろうな。
・・・にしても妖精が見えるなんて珍しいな！他に見える奴なんて立花くらいだ。
他の奴らは見えないだけじゃなく俺のことを馬鹿にしてきやがる！！」
琳「あ、あはは・・・；」
そりゃ普通変だと思うよ。あたしも見えなかったら大丈夫かって思うよ。
琳「・・・ってセリも見えるの！！？」
英「ああ、アイツも見えてたぞ。アイツに言われるまで俺も気付かなかった」
セリ、君は一体何者・・・？
とか思いつつも結局ノエルと仲良くなりました。
＊

の「へぇー！じゃあ、リンは妖精のお話とか聞いたことあるのね！」
琳「うん、昔お母さんに色々なお話聞かせてもらっていたから！」
の「そうなんだ！またどんな話かせてね」

ノエルはあたしが昔聞いた話に興味があるようだ。
やっぱり自分たちの話とかは気になるのかな？
てか、落ち着いてみると物凄く可愛い妖精さんだな／／／

琳「うん、いいよ。その時はノエルの話も聞かせてね」
の「もちろんよ。また一緒に話しましょうね」
琳「うん、いっぱい話そうね」

「また会った時に♪」と、微笑みながら言う。
の「ふふっ、なんだかアナタ”姫さま”みたいね」

ノエルが微笑みながら何かを呟いた。
だけど、あたしにはよく聞こえなかった。

琳「え？今なんて？」
の「ああ、気にしないで。大した事じゃないわ」
琳「え？そうなの？；」

あたしがそういうと「そうよw」と返された。
一度聞くと大した事ないって言われても気になるのはあたしだけだろうか・・・↑

英「おいお前ら、そろそろ遅いし寮に帰るぞ」

琳「了解！！」
の「分かったわ」

＊

空「おー、ヒメおかえりー」
琳「・・・あ、セリ！さっきイギリスから紅茶貰ったから一緒に飲まない？」
セリに見せながら荷物をおいて、紅茶を入れる準備をはじm――
空「え？ちょい！？」
紅茶を入れる準備を始める。
芹「おお、それは有難いな。遅いと思ってたらイギリスから紅茶貰ってのか」
空「言い直すなや！」
おい、いつから読心術を使えるようになったんだ、君は。
琳「まったくあたしは指名しないでって言ったのに、あはははー（黒笑）」
空「なんかごめん、まじごめん！！やから黒い笑みでこっちみんといて！！；；」
芹「はい、土下座しましょう」
セリがスッと話に入ってきた。

空「わかっｔ・・・って誰がやるかっ！！！」
琳・芹「「―チッ」」
空「おまえらぁぁあああああああああ！！」
防音のため、ソラの声がこの部屋だけに響きましたとさ。

（イギリスｓｉｄｅ）

の「イギリスーあんな可愛い子が居るなんて聞いてないわよ、このこの♪」
琳が見えなくなってからノエルがニヤニヤしながら俺に言ってきた。
英「はぁ！！？／／／何言ってんだ！アイツは男だぞ！？」
の「え？女の子でしょ」
「なに言ってるのよ、イギリス」とノエルは真顔で言ってくる。
いや、俺真面目に言ってるんだから真顔で聞き返してくるなよ・・・；；
英「確かに女顔だけど、男のはずだぞ」
の「・・・まぁ、それでいいわ（男じゃないはずなのだけれど）」
おいおい、なんだその投げやりな感じは・・・；
の「―にしても、リンってなんだか”姫さま”に似てるのよね」
英「そうなのか？てか、”姫”とか居るのか」

ノエルの言葉に疑問を浮かべる。
すると、ノエルは「ええ」と言って話し始めた。
の「そうよ。わたしたちの世界の本物のお姫様で、
口調とか性格もお姫様のようだったから親しい人からも”姫”
って呼ばれていたのよ。
とっても素敵なお方なのよ。綺麗で優しくてわたしの憧れの人
よ」
そして、「憧れすぎて口調を似せてしまったの」と、少し照れなが
ら言う。
英「そうなのか」
そうか、コイツの口調の元になった奴だったのか。
本当にその”姫様”という人が好きなのかノエルが語りだした。
あまり会った事はないようだが、話によると助けてもらった事があ
るらしい。
そして「そういえば」といきなり話を変える。
の「リンが微笑んだとき一瞬”姫さま”に見えたの」
英「気のせいじゃないか？」
の「そんなわけないじゃない！まったく、イギリスったら・・・；；
」
俺の一言が余程気に触ったのか声を上げ、その後呆れたような顔を
した。

英「でも、アイツとその”姫様”は関係ないだろ？；」
の「もしかしたら影響しているのかもしれないってことよ。
それにこの学校はただの一般人が来れるわけないのだから」
英「まぁ、確かにな。お前が見えてる時点でただの一般人ではないな。
ノエル、お前は一応”姫様”に琳となんかあるのか聞いてこいよ」

ノエルは首を横に振って答えた。

の「無理よ。だって”姫さま”は何十年か前から姿を消したのだから；；」
英「・・・なっ！？」
の「今はもう”姫さま”について何も分からないのよ・・・；；」
なんてことだ・・・り、琳にはその”姫”とは関係ない・・・よ、な？
そうは思ってもそれに対する返事など帰ってこないのだ。

関係（後書き）

書いた書いた！ggdgdであることには変わりないけれど；；
妖精さん出しました！じゃないとイギリスだけじゃ話が進みませんかr（（

このような長い話を読んで下さってありがとうございます！！

増えた謎（前書き）

どうも千星です！
今回は前回の内容の続きで少々暗め？というかギャグが少ないです；
あと、空ちゃん帰っちゃいました、折角のボケキャラが・・・（´・ω・、）↑
では、どうぞ←

増えた謎

『眠い・・・』

俺はそう呟いた。
昨日文化祭があったせいか朝でも疲れが残っている気がする。

それに今日は、空の見送りで早く起きたからいつもよりさらに眠い。
琳は俺が低血圧なのを知っているからか、話しかけてこないでこっちを眺めている。

正直有難いことだ。
だが、そんなことを知らないのかイギリスが話しかけてきた。

英「おい、立花」
芹「・・・・・・」

なんか真剣な顔だけどそういう話は昼くらいにしてもらいたい。

英「無視すんなよ、バカ。ちょっと話がある」

でもなんか大事な話っぽいから頷いてイギリスについていくことにする。
そんな俺とイギリスを見て琳と日本が不思議そうな顔をしている。

芹「それで話って？」
英「琳のことだけどお前何か知ってるか？」
芹「なに恋愛？恋愛は今眠いから控えてほしいなぁ～」
俺がそういうとすぐさま反論してきた。
英「そうじゃねぇよ、バカ！真面目な話だ」
そういってから「それにアイツは男だろ」と、付け足していた。
芹「じゃあ何？」
俺がそういうとイギリスの後ろからノエルが出てきた。
の「ねぇ、セリナ。リンはわたしが見えるらしいのよ」
芹「・・・はぁ！？」
ノエルの言葉に思わず声をあげた。
英「本当だ。昨日ノエルと話してたぞ」
昨日そんなことがあったのか、と思う反面自分の親の言葉を思い出す。
『あの子がこの学校に通わせるため』

・・・本当に一般人じゃなかったのか。

の「セリナもそのことは知らなかったみたいね」

芹「ああ、初耳だ。

―チッ・・・そういうことかよ」

英「なんか分かったのか！？」

ノエルも口には出さなかったけどイギリスと同じような事を思っているらしい。

芹「琳が普通の一般人じゃない、まぁそれは分かるとして・・・

アイツがただ霊感があるだけじゃないってこと」

英「なっ！？どういうことだ！？」

芹「ただ霊感があるだけだったら、学園長が俺のフリまでして招待状送んないってこと」

ただ霊感があるだけ学校から招待状を送ればいい。

それをあえて俺のフリまでしたってことは余程急ぎだったってこと。

つまり、何か”余程ものが関係している”ということ。

それを話すと、イギリスとノエルは何かに気付いたような表情を浮かべた。
そしてノエルが口を開いた。
の「セリナ実は、リンがわたしたちの世界の”姫さま”似ている気がするの。
　雰囲気とか口調は違うけれど、何故か凄く似ている気がするのよ」
その言葉に驚きを隠せなかった。
普段なら『気のせいだろう』と流す事ができたが、
せっきからの話でそう流そうとする奴は誰も居なかった。
もしかしたら、その”姫さま”とやらが何か関係してるのかもしれない。
だけどその”姫”についてノエルに聞くと行方不明で分からないらしい。
の「”シエラさま”・・・」
ふと、ノエルが呟いた。
・・ん？この名前どこかで・・・？
芹「ちょ、ノエル今なんて！？」
の「え！？し、”シエラさま”・・・？」

やっぱりどこかで聞いたことがある・・・どこだったっけ・・・。

英「おいノエル。シエラ様って？」

の「”姫さま”の名前よ」

名前、名前・・・。

芹「あ・・・」

遊(ゆう)さんだ・・・。

確かあの人が”シエラ”って呟いてた気がする。

英「おい、何か分かったのか！？」

の「ねぇセリナ、何が分かったの！？」

いっせいに俺に聞いてくる。

芹「あー・・・えっと、確か・・・

琳の父親がそう言ってた気がする・・・」

「「・・・え゛っ！？」」

な　ん　て　こ　と　だ　。

知れば知るほど謎が増えていく。

遊さん、あんたは何か知ってんのか？

琳「どうしたんだろう？イギリス」

日「・・・気になりますね」

あたしの言葉に日本君が答える。

いつもなら軽く流すのに今回は気になるみたいだ。

なんだろう・・・しかもイギリスからって珍しいな。

そのあと帰ってきたセリとイギリスは小声で何かを話したあと、いつもどおりになった。

日「お2人で何かあったのですか？」

日本君が聞くとセリが答えた。

芹「文化祭のことについて生徒会から各クラスの委員長に聞いてんだってさ」

英「あ、ああ。そうなんだ；　（そんな嘘がよくスラスラと・・・；；）」

琳「そうだったんだ！２人とも大変だね；」

芹「ホントめんどいわー」

そういっていると日本君が時計を見ていう。

日「あ、それより授業の準備をしておいた方がいいですよ」

その日本君の言葉を聞いてそれぞれが授業の準備をし始める。

増えた謎（後書き）

謎が増えたというより謎が少し解けたような・・・（汗）
はい、読んで下さってありがとうございます！！
今回は芹那さん目線が主ですねｗｗ

今は琳くんの謎解き編ですかね（笑）

知らされる秘密（前書き）

どうも千星です！
今回の話は琳くんの秘密が明らかに・・・・！？
・・・なれば良いなと思います；；

ではどうぞ←

知らされる秘密

の「ねぇねぇ、リン！前に言っていた妖精のお話ってどんなお話なの？」

わたしはリンに尋ねた。
前は自分たちの話に興味があったからだったけれど、今回は違う。
もしかしたら”姫さま”に関係ある話が出てくるかも知れないからだ。

琳「え？セリやイギリスも居るのにそのお話は2人が退屈じゃないかな？」
英「いや、大丈夫だ」
芹「問題ない」

琳「えっ、即答！？」

リンの言った言葉に2人は即答した。
―というかその言葉どこかで聞いた事があるような・・・。

まぁ、それは置いておいてリンに話を聞くことにする。

の「それで、どんなお話なの？」
琳「妖精が卒業試験に人間界に行って、人の”恋心”を持って帰ってくるように言われるの」

英「卒業試験！？」
芹「恋心！？」

2人が反応したのは当たり前だ。
卒業試験に”恋心”を取ってこいなんてわたしも驚いた。

だって私たちの世界にも卒業試験があるからだ。
しかも人間界に行けるのは優秀な生徒だけ。

恋心なんて聞いた事もない。

きっとほんのわずかな人だけが受けれられるのでしょう。
わたしたちの卒業試験は他の人に話してはいけないから。

の「それで、続きは？」

琳「卒業試験で恋心を取ってくるように言われて、
ほぼ人間に近い姿で人間界の学校に転校するの」
芹「・・・ほぼ？」
琳「うん。見た目は人間なんだけれど、妖精である羽根は消えないで縮んでいるだけなの」

わたしはそのお話が作り物のように思えなかった。
羽根を縮ませているなんてリアルすぎるから・・・。

琳「その学校で男の子と同じ寮に入ることになってお互いに恋するの。

でも、その男の子に妖精であることがバレちゃうの。

そこで両想いである事が分かって、
男の子が自分の恋心を妖精に渡して妖精界に持って帰るの。
その妖精は人間にしてもらって記憶をもったまま人間として生まれ変わって
その学校で人間としてその男の子と恋をするの。
・・・それが僕の聞いたお話」

「「「・・・・・・」」」

リンのお話はわたしの世界であるかも分からないようなお話。
けれどわたしにはその妖精が姫さまであるような気がする。

琳「あー・・・えっと、僕の話し方じゃ分かりにくいよね；；
こういうの話すの上手くなくて・・・；」
の「いえ、そんなことないわよ」

わたしがリンのフォローをしていると2人が聞いてきた。

英「なぁ、ノエル。どうだ？”姫様”と関係あるか？」
の「関係あるというか、わたしには”姫さま”のお話に聞こえるような気がするの。
それに姫さまが姿を消したのは卒業試験が終わってすぐの事よ。
」

つまりこの話は、姫さまに関係している可能性がある。

琳「ねぇ、なんでこの妖精が”姫”って呼ばれたか知っているの？」

「「「・・・はぁ！！？」」」

琳「え、あれ・・・違った？；；」

わたしは、何か姫さまのことで分かる事はないか知るために思い切って聞いてみた。

の「ねぇ、リン。アナタのご両親にお会いしてみたいのだけれどいいかしら？」

わたしが尋ねてみるとリンは口を重そうに開けた。

琳「あの・・・言い辛いのだけれど、お父さんとは喧嘩中なんだけれど・・・；」

セリナがそういうリンの肩に手を置いて親指をグッと立てて言った。

芹「よし琳。父親と仲直りしに行こうb」

琳「え・・・あの・・・；」

わたしもセリナの後に続いて強引に話を進めていく。

の「じゃあ、今週の日曜日に行くわよ」

琳「え・・いや、だから・・・・;;」

イギリスはリンに応援の眼差しを向けている。

英「大丈夫だ、頑張ってこいよ」

の「何言っているのよイギリス。アナタも行くのよ?」

英「え!?俺も!!?;;;」

驚いた表情を見せたイギリスにセリナが言った。

芹「もち、当たり前b」

こうして、わたしたちは休みの日にリンの家にお邪魔することが決まった。

琳「うわぁ〜・・・なんだか『凄く』入りたくない」

僕は家の前に立ったまま呟いた。

芹「凄くを強調すんな」

の「よし、それじゃあ入るわよ」

みんな無言で縦に頷く。

・・・いや、無言じゃなくてもいいと思うのだけれど;;

扉を開ける音が広がる。
あたしは一応「ただいま」と言って中に入った。
すると、さすがにこの人数。
騒がしかったのか違う部屋から人が現れた。
『・・・んだよ、騒がしい、な？』
―と、言っている時にこちらに気付いたのか目を見開いた。
琳「た、ただいま」
煉「お、琳じゃねぇか。どうしたんだいきなり？しかも芹那の他にも知らねぇ奴いるし」
かすかに笑いながら、イギリスの方を見て言う。
英「おい、琳。家族に連絡してなかったのか？」
琳「・・・忘れてました、すみません」
家に帰るのに心の整理がつかず、最終的には連絡を忘れていたのだ。
煉「まぁ、そこにずっと立ってんのもなんだし中に入れよ」
「「「お邪魔します」」」
お兄ちゃんの言葉で3人はそういって中に入る。

―（芹那ｓｉｄｅ）――――――

そして客間に入り煉が腰を下ろしてから全員をみて尋ねる。

煉「まぁ、このメンツで来るってことは・・・１つしかないよな」

その全員の中にはもちろんノエルも入っていた。

の「あら、やっぱりわたしのことが見えているみたいね」

煉「まぁな。それにここまで来てもらったんだし全部話した方がよさそうだな」

煉も見えんだ、と思ったけど琳も見えているのでそこまで不思議な事ではなかった。

それに反応が薄いからもう見慣れているのかもしれない。

芹「へぇ、煉は知ってんだな」

煉「まぁ、母さんが居なくなってから話聞いたしな」

やれやれ、といった顔で言った。

煉「んで、お前らは一体どこまで知ってんだ？」

の「姫さま・・・シエラさまがリンとなんらか関係しているかもしれないというくらいかしら」

琳は何を思っているのか何も言わないが、ノエルの言葉には少し驚きを見せていた。

煉「まーそこまで行けば上出来か」

煉は何かを考えながらそういい、口を開いた。

煉「ハッキリ言うぞ。俺と琳は人間と妖精との間に出来た子供だ」

「「「「・・・・・・」」」」

その言葉に全員は驚き口を閉ざした。

関係はあると思ったが、まさかそこまでとは・・・。

煉「まぁ、正確に言えば元妖精か？俺らの母さんは人間に生まれ変わってかららしいけど。

結局んとこあの世界の姫だし、元々の妖精の血が俺らにも受け継がれたんだろうな。」

英「だから、琳にもアンタにも妖精が見えたのか」

煉はイギリスの言葉に「そゆこと」といった。

煉「俺がこの話を聞いた時はさ、琳が小さい頃だったから琳は知らなかったわけ」

煉はそういって細かく説明してくれて最終的には全員が理解した。

・・・けど、

今俺にはそれより不思議に思っていることがある。

話がここに到達するまでに琳は一言も話していない。

おかしくないか？

自分のことなのに？

芹「なぁ、琳」

そう琳に話しかけると琳は口を開いた。

・・・が、

その言葉に全員が驚いた。

知らされる秘密（後書き）

ああああああ変なところで終わってすみません！！！！
変な内容ですみません！！！！

こんなんでも次回に続きますm（＿＿）m

解決（前書き）

どうも千星です！
なんていうかキャラメル食べていたら顎が痛くなりました；；

今回は前回の続きです。
では、どうぞ←

解決

『私の話ばっかりだと照れちゃうわね』

そういう言葉とは違いとても面白そうな笑みを浮かべる。

でも誰も言葉を発しない、目の前の人物に驚いているから。

今の言葉を発したのは間違いなく”琳”だ。

だけど、明らかに違う。

似ている所はあるけど、口調も雰囲気も琳のものではない。

そんな状況の中、ノエルが口を開いた。

の「・・・ひ、姫さま？」

『あら久しぶりね、ノエル』

の「やっぱり・・・それにしても姫さま。わたしの名前覚えて下さっていたなんて」

『ふふっおかしなことを言うわね。私が忘れるわけないじゃない』

芹「ちょっといいか？」

会話の邪魔をしたい訳じゃないが、説明が先だ。

芹「なんであんたが居るんだ？しかも琳の姿で」

『やっぱりそうよね。説明しないと。

ああ、それと今は琳の体を借りているけれど琳にも話の内容は伝わっているから』

彼女はご丁寧に説明してくれた。

『まず、私はシエラ。これは知っていると思うから次に行くわよ。
私がここに居る理由は、何故か死ぬ前に琳に私の意識が潜り込んだみたいなの』

シエラさんは色々説明してくれた。

今までは琳の中妖精としての力を回復していたらしい。
人間に生まれ変わったのに？と思ったが、どうやら彼女の力は強いらしく
人間としての人生は終わっても妖精としての人生はそう簡単には終わらなかったらしい。
彼女は人間として人生を終えるつもりだったらしいが、こうなってしまったようだ。

これは彼女にとっても予想外の事らしい。

そして彼女の話が終わったその時、玄関の扉が開いた音がした。

『おい、煉。お客さんでも来てんのか？』

彼はこちらに気付いて目を見開かせている。

『あら、ユウ。おかえりなさい』

『・・・・・・・;;』

遊さんもさぞかし驚いただろう。
喧嘩して別れたままの娘が家に居て、シエラさんと同じ口調で話しかけてくるのだから;

遊さんにこのことを話すと驚きはしたが「さすが姫さん」と、呟いていた。
いつもと雰囲気や口調が違うと思ったが、多分これが元々の彼なのだろう。
シエラさんも『出会った時とあまり変わらないわね』と、笑っていた。

そして、シエラさんから色々な話を聞いた。
まず遊さんとあった過去のことや、琳の夢に反対した理由。
(この話をしている時はイギリスもノエルも席を外している)
理由は凄く簡単なものだった。

琳は母親似だった。成長するにつれさらに似ていき、同じように料理関係が好きになった。

だけど、シエラさんは余りに早く亡くなった。
遊さんは未来までシエラさんに似て欲しくないと反対したらしい。

俺はハッキリ言って、なんて理由だ；；と思ったが、
それは彼にとっては、とても大事な事だったのかもしれない。

そしてそれは、シエラさんの説得により遊さんも琳の夢を応援する形となった。
ここまではめでたしめでたし、だ。

でも、もう男子として通ってる以上しばらくは男子として過ごす事にはなるだろう。
ここをどうするかだ・・・；；

（琳ｓｉｄｅ）

英「お前の家族、楽しそうな人達だな」
琳「あはは、そうかな」

ちなみにお母さんは、今はあたしから出てほぼ人間の姿をしてお父

さんと話している。
もう出られるくらい回復したらしい。

琳「それにしても、今日のことはビックリだね～」
英「あぁ、ビックリなんてレベルじゃねぇくらいにな」
琳「あ、あははー；；」

話しているとセリが辺りを見ながら行った。

芹「―にしても、そろそろ遅いし帰るか」

その言葉に、あたしたちもそれに同意して帰ろうとすると・・・。

シ「ご飯くらいちゃんと食べて行きなさい」

―と、お母さんに止められた；

結局のところ、全員で食べていく事になったのだけれど・・・

何なんだろうね、このメンツw
このメンツでご飯を食べるとは思わなかったよw

シ「よし、これ食べ終わったら久々に里帰りするわ。
　まぁ、そんなに長く向こうに居るつもりはないけれどw」
遊「んじゃ、姫さん気をつけてな」

煉「俺も行ってみたいもんだなw」

お兄ちゃんは冗談のつもりだったんだろうけれどお母さんはサラリと言った。

シ「普通に行けるわよ？私の血が流れているんですもの」

煉「・・・ま、まぁ。考えとく；」

お兄ちゃんは苦笑いをしていた。

まぁ何はともあれ、よく分からないけれどあたしの問題は解決したのだった。

解決（後書き）

はい、琳くんの問題は解決しました！
え？内容が強引？もちろんですよー↑
というわけで次回からはヘタキャラ登場です。
今まで影は薄かったかもしれませんが
イギリスのスーパー俺様タイムでしたからねw↑
では、次回も見て頂ければ嬉しいです（´∀｀＊）

珍しい昼休み（前書き）

どうも千星です！
最近忙しくて更新がなかなか出来ません；；
では、どうぞ←

珍しい昼休み

琳「んー・・・眠い・・・・」

あたしは教室に入るなり、自分の机に倒れこんだ。
家に帰ったときに知った真実も何故かすんなり理解できていて不思議な気持ちだ。

そしてこの学校はそういう普通じゃない生徒のための学校だったため、
自分が妖精のハーフと分かっても前と変わらなかった。

英「・・・おい日本。何でこいつらは教室に入ってた瞬間寝始めるんだ・・・？」
日「さぁ、どうしてでしょう・・・。眠いのではないですか？」
英「眠いんだろうな」

イギリスと日本の会話は不思議な所で途切れて終わった。

昼休みになってすぐにイタリア君とドイツさんが現れた。

琳「みんなで集まってどうしたの？」

伊「あ、琳！今はねみんなで勉強会してるんだよ」
琳「へぇー！そうなんだ！
―って勉強会！！？；；」
思いっきり声を上げてしまった。
いや、だってイタリア君が勉強してる姿って何か想像できないでしょ！？↑
琳「で、でもなんでいきなり勉強会・・・？」
今までは勉強会なんてしてなかったのに・・・。
独「あぁ、テストが近いんだ」
日「ですから、テストが近い時期はこうしてみなさんと一緒に勉強しているんですよ」
琳「・・・は、はぁ」
抜けたような返事をして首を縦に振る。
英「なんかそんなに納得してねぇよな？」
芹「まぁ、仕方ないだろ。俺と琳はこんな風に休み時間に勉強会と

かしたことねぇし」
琳「ないよね。ってか休み時間に勉強する人周りにいなかったし」
自分の学校の風景を思い出してみる。
うん、何故か愉快な人ばっかりで楽しいクラスだった。
勉強している人いなかったよ。

伊「へぇー！そうなんだ～なんか楽しそうでいいなぁ～♪」
琳「え？じゃあ勉強しなくてもいいんじゃないの？」
独「あー、この学校はな、
　テストの点数と順位が全校生徒に見える場所に張り出されるんだ」
英「だから良い点数じゃねぇと、って訳だ」

な　ん　で　す　か　そ　れ

点数までさらさなくてもいいじゃないですかー；；；
あぁ、だからみんな必死で勉強しているんだ・・・納得。
琳「・・・はぁ、仕方ない。テスト勉強しよう；；；」
芹「なんだ、琳も勉強すんのか」
琳「さすがにさらされるのは嫌だからね；；；」
そうセリと溜息をこぼしながら言うと

伊「え！？もしかして2人ともテスト勉強しないタイプ！！？」

―と、イタリア君聞いてきた。

琳「うん、あんまりしないなー」

芹「もちb」

伊「じゃあさじゃあさ、勉強教えてよ！お願い！」

そういってイタリア君が頼んできた。

・・・・・・は？

琳「は？えええええええ！？」

凄いビックリした。

あたしにそれを頼んで良いのか？

そしてイタリア君が可愛すぎて断りにくい件について。

芹「めんどいからやだ」

ちょ、芹那さん即答ですか！？

てかあたし、人に教えられるほど頭良くないんですけどっ！？；；；

英「・・・なっ！？お前別に教えてもらわなくても成績いいだろ！？」
伊「えー。イギリスの方が高いじゃんか～」
日「まぁまぁ、落ち着いてください」
・・・え、イタリア君って成績意外といいの？↑
琳「あ、あのさ・・・
ちなみにみんな順位何番目くらいだった？」
ちょっとした好奇心で聞いてみた。
英「2位」
日「3位でしたね」
伊「5位だったよー」
独「10位だった」
ちょ、なに！？みんな頭良い感じなの！？
てか、イタリア君が5位ってホントなのこれ！！？
琳「みんな頭良いんだねー。テスト勉強とかしなくてもいいんじゃないの（棒）」
芹「だよなーw」
英「くっそ、ムカつく・・・！」
いきなり苛立ち始めたイギリスに驚き「どうしたの！？」と、聞いた。

英「そいつ・・・

1位なんだよ・・・」

琳「えええええええええええっ！！？」

なんであたしの周りにこんな天才が集まってるの！？

ちょっと寄らないで・・・！あたしがさらにバカに見えるから！！↑

日「次は負けませんよ」

芹「おー頑張れ」

あれ、日本さんが珍しく意見を述べてるよ。

伊「その3人（というか日本とイギリス）が上位争いしてるからなかなか上に上がれなくて」

琳「あー、なるほど。

・・・うんイタリア君一緒に勉強しよう！

そして僕が分からないところ教えて！」

伊「もちろんだよー♪」

英「なんでお前ら一緒に勉強しようとしてんだよ！？
　そんなのズルイだろ！？」

別にあたしがイタリア君と勉強してもあんまり変わらない気がするんだけれど・・・。

芹「・・・じゃあさーwイギリスも一緒に勉強したらー？wwww」

何故かセリは笑いながらイギリスにそういった。

日「じゃあ、芹那さんもご一緒にどうですか？」
芹「面白いもん見れそうだしいってみるかーww」
日「本当ですか！？良かったです」

独「もう、勝手にしてくれ・・・；；」

結局のところ勝手に予定を決められていくドイツだった。

珍しい昼休み（後書き）

いやー私ももうすぐテストなんですよーいやですねー＾ｑ＾↑
ですからスミマセンがテストが終わるまで更新減りそうです；
でも出来る限り頑張りますよー！

テスト勉強（前書き）

お、お久しぶりです・・・千星です・・・；；
更新物凄く遅くて申し訳ない気持ちでいっぱいです（；´д`）

では、どうぞ←

テスト勉強

琳「あ、あはは・・・;」

な、何だろう・・・空気が重いな・・・・・・。

あたしは今、みんなでテスト勉強をしているところだ。

だけど・・・!空気が・・・思いです・・・・・・。

何かピリピリしてるー;;

そして天才の集まりだからだろうか・・・

会話も教え合いの声もなく、みんなただひたすら問題を解いている。

勉強会の意味・・・なくね?

教え合いが出来る雰囲気じゃないもん;

あたしは仕方なく、面白そうな目でこっちを眺めているセリに救いを求めた。

芹「・・・・・・はぁ。とりあえず休憩挟むかー」

伊「ヴェーやっと休憩だー♪」

琳「ホント・・・やっとだね・・・・;」

あたしは雰囲気が変わった事に安心しながら尋ねた。

琳「みんなって、勉強している時無言なんだね；びっくりしたよー」
伊「いや、俺は普段そうじゃないよ～。
さっきは分からないところ聞こうとしたら睨まれちゃったからね～」
琳「え・・・？」
誰に・・・？空気読め的な視線でも送られたのかな・・・？
てか、勉強の教え合い目的なのに・・・！？
日「私は空気を読んでいただけです」
芹「俺は面白かったから眺めてたw」
琳「やめてよ！；何か喋って空気変えてよ・・・！」
この２人・・・！；；
特に後の方！！今さっきの雰囲気のどこが面白いんだか・・・；

そして、ふと思った。
琳「そういえばさ、何で2人は順位争いしているの？」
視線をイギリスと日本君に向ける。
イギリスは分かるけど日本君ってそういうタイプじゃないよね・・・？

英「2人じゃねぇよ。そうは見えねぇけど立花もだ」
琳「え・・・？何で？」
セリもそういうタイプじゃないはずなんだけど・・・。
日「いえ、いつからかこの3人で一番順位の高い人は1回ずつ2人に命令できる。
・・・というイベントを始めてしまって」
琳「あぁ・・・」
なるほど・・・命令されたくない訳か・・・。
そう思っていると、日本君が口を開く。
日「イギリスさんには絶対に負けたくありませんね（スコーン的な意味で）」
芹「あぁ、俺も負けたくないわー（料理的な意味で）」
英「なっ・・・俺もお前らには負けないからな！」
イギリスはなんとなく分かるけど、セリや日本君がそこまで言うのは珍しい。
何かあったのかなー。
独「・・・はぁ、頭が痛くなるな・・・」
伊「ヴェードイツ、大丈夫？」
何となく理解できたドイツだけが頭を悩ませるのだった。

芹「あー、喉乾いたな・・・なんか取って来るかー」

あれから少し経ってのことセリがそういって立ち上がる。
ついでに全員分取ってくるわーというと日本君も立ち上がった。

日「あ、私もお手伝いしますよ」
芹「お、サンキューー♪」

そういって2人が部屋から出て行った。

琳「あの2人、仲良いよねー」

あたしがそういって笑んでいるとドイツさんが頷く。

独「そういえばそうだな。あいつらよく一緒に居るな」
英「おいおい、お前ら・・・ありゃどう見ても日本が立花こt――」
伊「イギリスー!!こ、ここ分からないんだけど教えてっ!」

イギリスが何か言おうとしているとイタリア君が慌てて遮った。

伊「イギリス、そういうのはあんまり言っちゃダメだよー;;」

・・・と小声で言っているのが聞こえた。

はて・・・何がダメなんだろー・・・？←鈍い

（日本ｓｉｄｅ）

芹「いやー日本が居て助かったわー」

そう言って飲み物を運ぶ芹那さん。

日「いえいえ、お役に立てて何よりです」

私的にもこの状況は少し嬉しいです。

すると、芹那さんが笑いながら口を開く。

芹「それにしてもさー、イギリスわっかりやすいよなーｗ」

日「はい・・・と言いたいところですが・・・」
確かに私から見てもイギリスさんは琳さんに好意を持っているように見えますが・・・。
日「イギリスさんが男性の方を好きになりますかね？」
芹「あれ？日本気付いてないん？・・・琳は女の子だけど」
日「・・・・・・はぃ！？」
私は思わず飲み物を落としそうになる。
一瞬聞き間違いかと思いました・・・；；
そして何故男装しているのか理由まで教えてくださいました。
私が聞いてよいのか謎ですが別にバレても構わないと言われました。
芹那さんの話によると気が付いている方は何名か居るそうで・・・。
それに、そう言われると今までのイギリスさんの行動も納得できます。
そういうことだったのですか。
芹「あ、でも、イギリスさー自覚してなさそうｗｗ」
日「あぁ、ありそうですねｗｗ」
芹那さんは琳さんの周りの環境が面白いらしいです。まぁ、私もですが。
イギリスさんが気持ちにいつ気付くのかも疑問です。

あの性格ですから、もしかしたらなかなか認めないかもしれませんね。

芹「俺は傍観しとくけど、日本は手助けしてもええんやでw」

日「いえ、私も出来る限りはみるだけで」

むしろ私は自分の事で手一杯ですからね・・・。

私が彼女に思いを伝えるのはいつになる事やら・・・。

日本は思わず溜息を着きたくなった。

テスト勉強（後書き）

・・・えーと・・・遅い割りにｇｄｇｄで申し訳ありません。
この章から恋愛方面に進めていく予定なのですが・・・
内容がおかしく・・・（，・ω・、）

実は日本君は芹那さん好きな設定で行きたいと・・・。

イギリス→琳
日本→芹那

今の所こんな感じですかね；；

もし宜しければご意見ください！

それでは＾＾

空気が重い（前書き）

どうも千星です！
いやーお久しぶりですね・・・
スランプあんど受験生という事もあってなかなか更新が進みません；；
本当に申し訳ない・・・；；
ではどうぞ←

空気が重い

芹「飲み物取って来たぞー」
日「ただいま戻りました」

そういって2人が返ってきた。

琳「2人ともありがとう！」

それぞれ2人にお礼を言って飲み物を貰う。

あー美味しい・・・喉か沸いていたから余計に美味しく感じるー。

日本は琳を見ながら芹那の言っていた事を思い出していた。
そんなことを知るわけもない琳は、イギリスが何か言っていたなーと思って2人を見た。

すると、日本君とバッチリ目があった。

琳「日本君どうしたの？」
日「あー・・・いえ、何でもないですよ；；」

何でもないのかー・・・まぁ、たまたま目が合っただけなんでしょ。

独「よし、それでは勉強を再開するか」

その言葉であたしたちは勉強を再開した。

・・・した、んだけど・・・；；

カリカリカリカリ・・・

カリカリカリカリ・・・

あああああっ！やめたげて！！耳がおかしくなりそう！！神経削る！！；；

だからなんで無言なのさ！？勉強会ですよなう！！

あたしはまたもやこの空気に押しつぶされそうになっていた。

セリは今何を・・・・・・・・・！？

Σ何！？もはや勉強すらしていらっしゃらない・・・だと！？

あたしの視界に映ったのは・・・

本を読んでいるセリでした。

ああ、神様・・・あたしはこの方を見習う事ができたらどれだけ幸せに生きられた事か・・・↑

あーあ・・・勉強とか重い空気でやるなら1人で自主勉強している方がマシだなー;;;

カリカリ・・・↑勉強やめて落書きを始めた音

今日の晩ごはん何かなー←現実逃避

あー変なことばっかり考えていたら・・・目しばしばしてきた・・・。

・・・ね、む・・・・・・・・・。

独「よし、今日はもう遅いしこれくらいにしておくか」

伊「ヴェーやっと終わった；；；」

ドイツのその言葉を聞いてイタリアが背伸びをしていた。
他の国たちも軽く肩の力を抜く。

日「やっと終わりましたね」
芹「だな。あー疲れた、眠い」
英「お前は途中から勉強してねぇだろうがっ！」

琳「ＺＺＺ・・・ＺＺＺ・・・」

さっきから一言も喋らない琳を不思議に思い見てみると寝ている琳が視界に入った。

日「おや？琳さんが寝ていらっしゃいますね」
芹「まぁ、あんな神経擦り減らす様な空間に居たんじゃな」
日「そうですね、居心地悪そうでしたしね」
芹「あーすっげぇ居心地悪そうだったな」

チラッ・・・

芹那が軽く視線を向けた。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・;;;」」」

その言葉を聞いた何人かはなんだか悪い事をしたような気持ちになったとか（笑）

空気が重い（後書き）

はい、なんか結局ｇｄｇｄして終わったっていう＾ｑ＾
可笑しな文になってしまいましたｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6561u/

†World School†

2011年11月21日22時43分発行